

---

**A L F**

由城 要

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ALF

### 【Nコード】

N9683P

### 【作者名】

由城 要

### 【あらすじ】

魔女を捜して、野を越え山を越え……。しかし少年が出会ったのは自称魔術師だった！？

## 序章 僕だけの思い出

息も白く染まる、厳寒の冬。舞い落ちる結晶が樹へ屋根へ、そして地面へとその純白な粒子で目の前に広がる小さな街道を一色の景色へと変化させる。

砂礫をも覆い尽くした無数の粉雪は人という存在に汚されるまでの儚い刹那を、光なき雲に奪われた天へと向けていた。

上昇を始めた太陽という希望が例えどんなに高点へ上り詰めたとしても、雲がそれを遮り、誰も気付く者はない。

また雲無き空にその風景がどれだけ煌々と光り輝いたとしても人々の心に闇がある限り、その瞳が天空へと向けられることは皆無であるのだ。

燻る火のように中途半端な希望の光と、揺らめく影のような絶望。

暗い影を落とす街は活気だったかのような空気もまた空回りの裏返しとなって、ただ虚しさと呼び起こすだけであった。

希望という2文字さえも時の流れに掻き消され、気休めにもならない。そう、時とは希望の裏に絶望をも隠し持つもの。誰も望まぬ答えが、皆の頭を過ぎり始める。

それも時という悪魔が影を連れ、太陽を隠す雲のように彼等の儚い希望をも完全に消し去ろうとしているせいであろう。

その中、一軒の家が扉を開けた。ドアに取り付けられたベルが軽快な音を辺りに響かせ、純白の景色がそれを吸収する。だが、金属音に続いて、今度は晴れやかな声が響き渡った。

「雪ーっ！」

飛び出してきた2人の少女。幼い面持ちに同じ容貌の2人の女兒が静まりかえった風景に愉快的笑い声を上げた。

暗闇に似た髪から、顔立ち、身長、そのシルエツトまで同型の少女達はその家の双子のようで同じ服を身に纏い、同じ手袋で手を繋ぎ、雪の中を駆け回った。

小さな足跡に汚されていく庭は、子供達の息をも白く染める。小さな手でいくつもの跡をつけては笑い、結晶を丸め込んで投げて遊ぶ。

その笑顔は絶望など知りもしない、一番の希望のように輝いていた。

しばらく騒ぎまわった双子の女兒は純白の景色に足跡をつけるのに飽きたのか、今度は庭先に数十年も存在し続ける1本の杉の木の下に腰を下ろした。

濡れることも、叱られることも気にしない、純粹な遊び心。それが今度は樹を揺らし、積もった雪を落とすことに向かった。

手に届く範囲の枝を掴んではやみくもに動かす、落ちる粉雪に同じ歓声を上げる。永年存立し続ける杉は撥ったそくに体を振った。

『おわっ！』

突如、彼女たちの頭上からそんな言葉が落ちてきた。何かにバランスを崩したような、切羽つまった声色が、焦りを交えて怒鳴り声となる。

『や、やめっ……お、おいっ！お前等、止めろ！揺らすな！』

子供は叱られることを極度に怖がる。それはこの双子も例外では

なかった。2人共反射的に肩をすくめ、寄り添うようにして恐る恐る上を見上げる。しかし、声の主の姿が彼女達の茶色の瞳に映ることはなかった。

樹には、人が登れる場所などないのだ。

『……おっと、取り乱しちまったか。ま、許してくれ』

咳払い1つしてそう言った「声」は、木々の間から何かを落とした。純白の庭に、1枚の真っ白な封筒が雪と同じように舞う。双子のうち1人が恐る恐るだが、その封筒を手に取った。

まだ文字すらも分らないのであろう女児達は顔を見合わせ、互いに首を捻った。2人のその様子に、親切にも「声」は言った。

『お待ちかね、兄貴からの手紙だぜ!』

誰のものかも分からぬ声。しかし幼い少女達はそれを疑うことなく、その言葉を信じた。

同時に顔を見合わせ、今日一番の歓声を上げる。

いつの間にか止んだ雪。雲間からは久方ぶりの太陽の光が差し込み始める。

それは僕だけの、大切な思い出。

## 第1章 1 魔女を求めて

風はまだ何処かに包むような暖かさを含み、澄みきった群青色の空にも晩夏の暑さの名残が残っていた頃。

まだ冬の訪れさえも知らない山吹や紅に変化を遂げたシュリンク山脈は、ススキの穂が揺れる高原の背景を鮮やかに彩っていた。振り返れば上陸と東の大海を隔てた懐かしい風景が一望出来るのと同じ時に、王都ラクトウスが彼方に望むことも可能だった。

「……うわぁ……」

腰にまで届く位の背丈の草が、一様に夏の名残の風に揺れた。擦れてはサワサワと乾いた音をたてる草原。向かい風は少年の茶褐色の髪をもふわりと弄び、その肌を擦って通り過ぎた。

彼は飛ばされないように、と手に持っていた地図を握りしめ、眩しさと空気の流れに瞼を閉じる。風に突き動かされるように彼の古地図もその手の中で暴れ回った。

半分色あせ、所々に破れた跡の見受けられる地図にはとある場所に真新しい印がされている。

風が緩やかになり、そして消えてゆく。彼は瞑っていた瞼を開け、もう一度ススキの草原を端から端まで見渡し、飛び込んだ。

軽やかに通り過ぎる幾つもの風。

揺れ動くススキがまるで1つの海のようにも見えた。彼は笑う。笑顔を浮かべ、高い蒼天を見上げると大きく深呼吸をした。

彼はまだ子供のような表情をも醸し出す、幼さの残る顔立ちをしていた。まだ大人とは言えない風采は純粋な瞳と共に成長途中の姿

である。

茶褐色の髪と瞳、そして色白の肌が見ている者に柔弱な印象を植え付けるが、この山脈をここまで登ってきたという事実はそれを覆す。

ルーク・フロー。それが少年の名である。彼は堅実であり、穏やかな性格の持ち主であった。そして空のように広い優しさをも持ち合わせていた。

だから彼は今ここにいる。

「あつ、そうだ、こんなことしている場合じゃなかった！」

ルークはまだ若いスキの穂の間から顔を覗かせ、忘れていたかのようにそう声を上げた。見上げた晩夏の日差しが、もうすぐ日の暮れることを物語っている。南中から傾き始めた太陽がゆっくりと西の山脈の向こうへと降りてくるのだ。

だがしかし、彼は野宿をするための道具など、持ち合わせていなかった。闇が高原を包み、身動きが取れなくなる前に目的地につかねばならない。

小さな望みを託す、たった1つの目的を果たす為に。

「えっと、ここが高原の北東で、目的地は……」

小型の磁石で地図と目的地の方向を確認すると、ルークはもう一度辺りを見回した。街を出たときから、そんなに簡単に目的地が現れるなど思っていない。

だから、磁石が目的地を薄暗い森の奥を差しても、さほど驚きはしなかった。

風にざわめく木々が、ルークを誘うように体を揺らします。頬を掠める風が少しだけ冷たく感じたのは日光が雲に遮られたせいばかりではない。

近づいていくと、その鬱蒼とした森は紅葉し始めた周りの景色に反して、常緑樹の集まりのようだった。

その真緑色の集合体ともいえる森はどこか、湿気を伴う空気を外へと排出する、伝説によくいう魔物のようだった。もっとも、そんなものは空想の産物でしかなく、本気で信じるものなどいない。ただそうゆう存在を考えることがルークにとっては楽しかった。

「……いけない、早く行かないと……」

ふと想像の世界に浸っている自分に気付いて、ルークは頭を振った。今はただでさえ時間がないのだ。彼は地図を破らないように折り畳み、肩に下げていた鞆の中に入れた。

ルークはゆっくりと観察するかのように辺りを見回しつつ、足を踏み入れた。鬱蒼と茂った森は出口が見えないくらいに遠くまで続いているようだった。

圧倒されるような、森の存在感。改めて見上げてみて、少しだけ足がすくんだ。太陽の日差しを拒むかのように生い茂った枝と葉が辺りを薄暗く、湿っぽく感じさせる。

恐怖心は、森の中に足を踏み入れた時から心の何処かに存在していた。それが段々と警告を発しているのが分かる。

そう、いつの間にか奥へ奥へと歩き続ける自分に、もう1人の自分が制止の声を投げかけていた。けれど、後戻りをするには出来ない。

ルークはゆっくりとだが確実に前へ、前へと足を進めていった。

ふと、森の中を緩やかな風が通り抜けた。木々の間をすり抜けた

せいか、それとも何処かで反響したせいか…風は、何かが啼くような声にも似ていた。

『……あ、……か……れ……』

発汗を誘う熱を孕んだ風の啼き声。最初は自然の悪戯だろうと頭の中で否定したルークも、もう一度吹いた同じ風に、とうとう足を止めた。

それはまるで、人の声のようだった。

『そ……い、……ふ……』

細切れになった言葉の断片のような、風が空洞を通り過ぎる時に起こる音のような。それは確かに風の啼き声と称するには相応しかった。

それは人の声のようでもあり、ただ風が啼いた音のようでもある。それはとても神秘的な旋律で耳の中で反響し、消えていった。

木々が揺れるとまた、あの風の啼き声が湧き上がった。

ルークは奥から聞こえてくる不可解な音に狼狽えながらも、息を整え歩みを再開した。その足取りには明らかに不安と理解できない現象への微かな恐怖感によって重みを増している。

ルークは行く手を阻むかのように立ち並ぶ樹木の間をすり抜けながらも、また微風に乗って流れてくる啼き声に何度も足を止め、辺りを見回す。

「……どんどん……大きくなってる」

風の創り出す摩訶不思議な高音。それがルークの元へ、その音を徐々に大きく、高めながら増してきていた。しかし、周りには湿気を含んだ風に揺れる常陰の木々と、地面に浮かび上がる微かな上空

からの光しか見あたらなかった。

しかし、その状況はルークの恐怖心を膨れ上がらせるには十分な要素を持っていた。実際に彼は寒気以上の、何かに見つめられているような感覚を嫌という程味わっていたのだから。

いても立つてもいられず、とうとう彼は走り出した。目的地がこの薄暗い森の中に存在することを信じ、絡みつくような空気の流れに逆らって走る。自分の意識が何度も警告を発していることは、彼自身が一番よく知っている。そして、その警告を何度も押さえつけようとしている自分の勇氣に、少しだけ驚いていた。

後戻りは出来ない。何故かそんな気がした。

直線的な太陽の日差し。

切り裂くように現れた日光と、まだその明るさに慣れない目がルークの足を止めた。

漂うものの何もない、開けた土地。刹那、ルークにはそれが真っ白な無の空間に見えた。

闇のように黒い空間ではない、白の無。それは何処か恐怖という感覚を掻き消してしまう程、神聖で静寂に満ちていた。だから、その中に無数の花が揺れる情景が浮かび上がってきたとしても、神秘の成せる技として受け入れることが出来た。

それはルークが本来の思考を取り戻すまでの短い間ではあったが。

「……？」

風が涼風に変化したように思えた。ルークの背を押すように通り

過ぎる風は視界に広がった花畑を揺らす。

舞い上がる花弁は秋桜にしては大きく、色も濃い。丸みを帯び、赤く鮮やかな花……。それは赤だけではなく、白、黄色、紫など様々な色彩を見せていた。

それは、この紅葉の背景には不似合いなチューリップ。

それに気付いた瞬間、ルークは足下から寒気が這い上がってくる感覚に陥った。鎖に拘束されたかのように強ばった足を渾身の思いで後退させる。

額に滲み出た汗が頬を伝っていく感覚を、ルークはしっかりと感じていた。

「……今、秋だよ……？」

誰に発したのでもない、そんな言葉はざわめき始めた木々の騒音に消されていく。ルークは体を強ばらせた。

ふわり、と髪を弄んだのは意外にも暖かな風だった。緩やかな空気の流れ。その風上に古ぼけた建物のようなものが見える。

長年雨風にさらされた形跡の残る、小さな家のようなだった。

ルークは瞬時にそれが目的地だと判断した。それは彼の思い描いたものとは少々違っていたが、早くここを立ち去りたい気持ちと、この奇妙な風景が目的地だからこそその風景なのだと割り切ろうとする気持ちが混じり合っていたのだ。

おそろおそろながらルークは足を踏み出した。無邪気に揺れる無数のチューリップの花が視界に入らないように顔を上げ、真っ直ぐその建物を目指す。

風はルークの後押しをするかのようにゆっくりと吹いて、その横を通り過ぎていった。

『天の目の如く、光揺れ』

しかしルークの足は止まった。微風に乗り過ぎ去った1つの旋律が、ゆっくりと消えていく。それは風の悪戯にも、空耳にも思えた。しかし、それが先程の風の啼き声だと悟った瞬間、ルークの思考は1つの明確な答えを出すことが出来た。

(……歌?)

誰の、という疑問がルークの中に浮かび上がった。先程から視界に入る限りの場所を見回してはいるが、何処にも人の姿はない。旋律の発生源もよく分からない。

それはまるで自分を取り囲む木々が唄っているようにも、チューリップの花々が唄っているようにも聞こえた。

いや、後者だ。

(花が……唄ってる?)

歌はルークの立っている場所より下から聞こえた。八方のチューリップが風に揺れる度旋律を紡ぎ、花弁が風に乗って中央で渦巻いている。

それは何故かとても印象に残る風景だった。この状況に反してルークはその歌声に聞き惚れてしまったのだから。

『幾許清き風は吹く』

ルークの思考はいつの間にか夢と現実の狭間を彷徨っているような、体の浮くような心地がしていた。

頭が否定されるような眠気にも似た感覚に自身の警告は薄れてゆき、いつの間にか霧に包まれ、消えてしまった。

ルークはゆっくりと足を前へと進め、中央の小さなつむじ風に向

かつて歩き出していた。

揺れる花から1枚、また1枚と花弁が摘み取られていき、花畑の真ん中で空へと躍り上がる。

春のように暖かい歌声だ、とルークは心の中で思った。優しい日差しの中で眠っているような、春風に頬を撫でられるような、そんな気分がしていた。

（なんだろう……すごく、優しい……）

『千の護りと証をもって』

ふ、と目の前を闇が覆った。それに気付いた時、ルークは自分の意識がいつの間にか無意識に変わっていたことを知る。

逃げ出したいと思っていた気持ちが何処かへ遠退き、自ら花畑の中心へ足を踏み出していたことに驚く。

まるで、夢に入る一歩手前のような感覚だった。心地よい気分から急に現実へと引き戻される。

「……止めなさい」

凜とした声は、耳元ではっきりと聞こえた。それによってやっとルークはこの闇が誰かに目を覆われたからなのだと知る。

「彼等の歌は確かに綺麗だけれど……彼等の居場所まではついていてはいけない」

『汝 扉の鍵とせん』

「人の世界じゃないのよ、そこは」

「……え？」

その手を振りほるとき、後ろを見やることは容易かった。ルークはその人物を振り向いた時、まずその瞳に囚われた。

花畑の中心を見つめていたのであろう、真っ直ぐな瞳は晴れ渡った秋空より澄み渡り、透明度の高い海のように蒼い。そして傾き始めた太陽に照らされた金色の糸のような髪が1つに纏められていた。白い肌と対照的な黒のローブと、派手にも地味にも見せることのない清楚な姿が特に印象的である。その外見はどうやらルークより2つか3つ年上のように、その顔はほとんど女性といってよいほど整った輪郭をしていた。

「誰も入れない……彼等だけの場所」

そう言つと、彼女はゆっくりと周りを舞う1つの花弁へと手を差しのべた。ふわり、と一瞬浮かび上がった紅いそれは、細い指の間から砂が風に流されるように消えていった。

真紅の粒子が空に消えてゆく。ルークはその時初めてもう日が暮れ初めていたことに気付いた。

「あ、あの……」

やっと本来の目的を思い出したルークは自分より幾分高い視点を見上げ、真っ直ぐに相手を見つめようとした。

風がいつの間にか消え失せ、舞い上がった花弁がいくつも茜色の空から舞い降りてきた。

花吹雪というには数が少なかったが、それはとても幻想的で美しかった。

その下で、彼女の声は何よりもはっきりと響き渡る。

「魔女の庭へようこそ。セカンド・サイトを持つ者」

## 第1章2 失踪事件

「……失踪？また？」

ルークは顔なじみとなった街の住民達が玄関を出ていくのを見送って、傍らに立っていた父の顔を見上げた。15の息子がいるとは思えない、年若い父親はしきりに顎をさすりながら、リビングへと足を向ける。身長は平均からすれば高く、中肉中背の後ろ姿には、昔からルークが見つめてきた父親の威厳があった。しかし、顎をさするという父の癖にどんな意味があるのかルークは知っている。リビングの中央に置かれたテーブルには3つの客人用のティーカップと、父専用のそれが並べられている。盆を手にその1つ1つを重ねながらソファに腰を下ろした父に言った。

「今度は何処であつたの？」

「……商業区裏手の丘だ。雑貨屋の三男坊……お前も顔くらいは分かるだろう」

重々しく告げられた言葉に、ルークは事件の身近さと重大さを改めて思い知る。ルークの住む街は商業区、工業区、そして居住区の3つに分かれており、東の大海に面した港には、北側に居住区、その下に商業区が隣接している。南には河川の利用によって発達した工業区があり、そしてその3つの区を囲むようにシュリンク山脈がそびえ立っている。

商業区裏手には、子供も大人も自由に時を過ごす自然公園がある。小さな丘ではあるが、最近では遊び場として多くの子供が行き来している。ルークもそこを駆け回った者の1人なのだ。

そんな身近な場所で起きた事件。ルークは少しだけ胸の詰まるような想いにかられた。雑貨屋の末っ子なら、面識もある。確か、茶色の短髪をした腕白な子で。

「王都に調査の要請を出せ、と言われた」

ルークのそんな思考を悟ってか、父はそんなことを言った。父はこの街の町長であり、何かと住民に頼られる立場にいる。苦笑いを浮かべるその表情を見ると、どうやらかなりの討論が交わされたらしい。失踪事件について街の自治体でも搜索が行われているが、結果は一向にあがらない。それを指摘されたのだ。

「王都も王都で貿易摩擦やら、国境問題やら、手一杯ときている。

……田舎街の意見まで聞き入れてくれるほど、暇ではないらしい」

そう言っ手渡した茶封筒は王都からと印されており、中身は調査団派遣依頼の返事だった。難しいことはよくは分からないが兎に角、遠回しに「派遣は出来ない」ので調査は自分たちでやって欲しいと書かれているようだ。

ルークは肩を落とし、父親を見上げた。その眼差しはどうにかできなものか、という気持ちが混じっている。それ故に、父は苦笑し、言う。

「おいおい、そんな目で見るなよ。私も、王都に派遣依頼を出すことしか出来ないんだ」

「……そう、だよな……。ごめんなさい」

俯くルークに、父は優しく諭す。溜息混じりの冗談も、この時ばかりは皮肉なものにしかならなかった。

「町長などと言っても、頼れる者など少ないものだ……。他に頼れる者など、賢者が勇者か、魔女くらいか？」

ルークはふと父親の顔を見上げた。力のない父の口から零れた1つの言葉が、ルークの心の中に1つの希望の光を灯した。それはまるで消えかけた暖炉の燃え滓のようでも、最初に放たれた燐寸の火のようでもあった。

そんな小さな希望。だが、ルークは信じたかった。

「……して、みようよ」

「ん？」

頭を撫でていた父が、ルークのそんな呟きに手を止める。ルークはその目を真っ直ぐに見つめ、真剣な眼差しで言った。

「探してみようよ、父さん。魔女を」

自分でもそれがどんなに無謀なことであるか、分かっていた。魔女という者はここ30年以上姿を現してはいない。もつとも、昔には時折魔女が山から下りてきて、病人や怪我人に薬を渡して代金の代わりに作物を貰って帰っていく、なんてこともあったのだが、王都は魔女という存在を確かなものとして認めず、立場の苦しくなった彼等は山のずっと奥で最後を迎えたと囁かれている。

「ルーク、魔女はもういな……」

「いなかったとしても」

ルークは立ち上がり、残っていたティーカップを盆の上に乗せ始めた。せっせとテーブルの上を片付け、布巾でテーブルを拭く。立ち上がると、心底困ったような表情を浮かべる父に宣言した。  
その気持ちは彼の元来の願いなのだから。

「……僕、父さんに……ううん、父さんと母さんに恩返ししたいんだ」

真っ直ぐなその瞳は、彼の性格を一番よく物語っている。ルークは盆を片手にキッチンへの扉を開けた。振り返ったその顔は笑顔。

「それに僕シュリンク山脈への道なら知ってるんだ。失踪事件ってこの街でしか起きないんだし、街さえ出せば、1人でも安全だよ。ねっ、父さん」

滅多に我が儘など言わない長男に父親は少し面食らった。そして短い溜息を吐くと、頭をかいた。その表情には苦笑としか形容できない笑みが浮かんでいる。

「まったく……その性格は何処の誰に似たんだか……」

扉の閉まった音に、父は人知れずそんな言葉を漏らした。

「……うわぁ……」

花畑を越えた先、そこにはかなりの古家が建っていた。ヒビの入った土壁は長年の太陽を受けて乾燥し、触ればボロボロと崩れてしまいそうな感覚を覚える。窓には割れた跡があり、適当に修復されてあった。夏ならまだしも、冬ならば隙間風が通るに違いない。

客間らしき部屋に通されたルークは、異様な雰囲気漂う空間に一瞬足を止めた。棚には酒瓶に似たものが並んでおり、その隣にはどうみてもホルマリン漬けとしか思えない物体が置いてある。足場は確保されているが、ふと視線を逸らせばタロットカードと思しき札が部屋の隅で散乱している。

斜陽の差す薄暗くなった部屋で、女性はランプの火を灯した。部屋が明るくなると、ルークの目にも様々なものが飛び込んでくる。テーブルの脇に本棚があり、そこにも本が乱雑に置いてあったが、中には天使学、悪魔学といった本、魔術に関する本等、ルークが初めて見るような本ばかりであった。

ルークはその1つを手にとってみる。少し埃を被ってはいたが、題名を認識するのは至極簡単だった。

「……『貴方も出来る！魔術入門ガイドブック』……？」

何か見てはいけない物を見てしまったルークは、彼女に見つからないようそれを本棚に戻し、また辺りを見回す。

ふとその頭上で鳩時計の鳴き声が聞こえた。一瞬びっくりしたルークだったが、その時計を見上げて安堵の溜息をつく。しかし、それも彼がその異変に気付くまでのごく僅かな間だったが。

「あ、あれ……鳩じゃなくて鳥？」

時計の窓から顔を出す、何処か間の抜けた黒い瞳と、漆黒の闇色に染まった翼。鳩時計ならぬ鳥時計はとてつもなく奇妙な声でガア、と鳴いた。驚きの声を上げる少年に金髪を耳にかけつつ、女性は苦

笑する。

「珍しい？さつきから色々眺めているけど」

「え、あ、すいません……」

不思議な物に目を引かれたとはいえ、人の家の中を不躰に眺めまわしていたことに気付き、ルークは顔を赤くした。謝罪の言葉を述べると、彼女は微笑みながら戸棚から取り出したティーカップに、向こうの部屋から持ってきた紅茶を注ぐ。

「いいのよ。……そういえば、まだ名前聞いていなかったわね。私はレオナ・デイル。よろしく」

先程の神秘的な雰囲気とは違い、優しい笑顔を向けるレオナはティーカップの片方を差し出した。暖かい湯気が、カップから白く立ちのぼる。それを受け取りつつ、ルークは言った。

「あ、ルーク・フローと言います。それなので……さっきの話なんですけど……」

まだ熱い紅茶を飲み干すには時間が必要そうだったので、ルークはそれを冷ましながら、レオナという名の女性を見つめた。自分より何歳か年上という風采の彼女は、どう見ても自分の探していた魔女には見えない。

レオナは紅茶に一口口を付けると立ち上がり、空いていた窓を閉め始めた。

「……ああ、セレスね……」

セレス。それはルークの探していた魔女の名前だった。

ルークは街の図書館や父の書庫から文献の1つ1つを調べ上げ、魔女の項目を探した。流石に最近ではその姿が見られないせいか、魔女に関する資料はごく僅かしかなかったが、その中で一番に目をつけたのが、北西の魔女。

最後の魔女とされる、4人の魔女。東北、南東、西南、北西の4方に永住の地を求めた4人の魔女の1人。シュリンク山脈の山奥で暮らし始めたと言われるその魔女は数十年前にはルークの故郷である港町付近にもよく現れることがあったらしい。

しかし、もう誰も彼女のことを覚えている者はいない。

レオナは椅子に腰を下ろすと、紅茶を片手に頬杖をつきながら、何をばかすることもなく、さらりと言つてのけた。

「あいつなら今行方不明よ」

「……え？」

思わずルークはレオナの蒼い瞳を見返した。自分の発言が分かっているのか、レオナは笑顔を崩さない。複雑な表情を浮かべているわけでもなく、相手を心配しているという素振りも全く見あたらなかった。

「いつものことなんだけどね。いつの間にか書き置きしてどこかに行ってしまうから……」

「それじゃあ……」

悲痛な少年の言葉にレオナは視線を逸らすこともなく、相手を見つめていた。ルークは溜息を漏らすわけでも、泣くわけでもなく、ただ視線をテーブルの上に落としている。

小さな可能性を頼りにし過ぎていた自分をルークは情けなく思っていた。父や母の為に出来ることをしたい。そんな思いもこの状況ではどうすることも出来なかった。

テーブルの端にあった砂糖をスプーン1杯分自分のカップに入  
ると、レオナはそれを溶かしつつ、ルークを諭す。

「セレスのことは諦めなさい、その代わり……」

レオナは紅茶に口をつけ、俯いている少年を真っ直ぐに見つめた。  
破顔の表情は今のルークには見えていない。

「この魔術師、レオナ・デイルが引き受けてあげてもいいわよ」  
「……え？」

ルークは自分の耳を疑った。否、沈んでいる思考が彼女の言葉の  
半分しか聞いていなかったというのが本音だが。

レオナはゆっくりともう一度同じ言葉を口にする。紅茶が力チャ  
リ、と音を立て、その表面に小さな波が出来た。彼女のその微笑み  
が、その中に映り込む。

「魔女だけが貴方達の助けをするわけじゃないわ。私がその依頼、  
引き受けてあげる。ただし……」

砂糖の入った小さなガラスの瓶を勧めつつ、レオナはその蒼い目  
を細めた。柔らかく微笑んだレオナの表情にルークは少しだけ不安  
なものを覚える。

「条件付きで、ね？」

「僕が助手をする……だけでいいんですか？」

ルークはレオナに家の中を案内されながら、そう問う。日が暮れた屋敷の中はいつそう不気味さを増していて、所々に置かれた本棚や天井に張った蜘蛛の巣、そして意味不明な置物がその雰囲気を作る。しかし、長年そこに住んできたレオナにはさほど気にするものでもなかった。

「理由は2つよ」

レオナはランプを片手に廊下を歩きながら、振り向かずに話を続けた。

「1つは、情報収集能力。さっきの貴方の説明、要点がおさえられてて、こちらの聞きたいことがよく分かっているし受ける側としては、すごく役に立つわ。……もう1つは」

言葉を切り、突き当たりを曲がった彼女は、どこかの部屋に足を踏み入れた。テーブルや棚の位置からすると、どうやらキッチンのように見える。ルークは辺りを見回しながら、レオナが部屋を照らし出すのを待った。

急に明かりの灯った部屋は、ルークの予想通りキッチンだった。レオナは流し台の横に歩み寄ると、片隅にあった何かに手を伸ばす。最初は野菜に埋もれていたので分からなかったが、レオナは「それに声をかけた。」

「……メニカ。起きなさい。もうすぐ夕食の時間よ」  
「……？」

動物でもいるのだろうか、と横から覗き込んだルークは反射的に体を硬直させた。

それは相手も同じらしく、

『ぴぎやつ！？』

と形容するに相応しい奇声が小さく、そして高くキッチンに響いた。しかしどうやら相手は寝起きだったらしく、目覚めに知らない人物の顔があつたせいで心臓の止まる思いをしたようだった。

ルーク自身も驚いていたものの、固まっただまま時折体を震わせている様を見ると、何故か申し訳ない気分になられた。2人の様子を面白そうに眺めていたレオナは、どこからか持ってきた小さな、とても小さなエプロンのような布を、それに被せる。

「メニカ。今日の夕食は2人分お願いね」

『あ、ああああの、ご、ごごごご主人様っ！？あの、その、お、おおおおお客様、で、ですかっ？』

わたたと両手を振り回しつつ、『それ』は言った。本来ならば挨拶するべきなのだろうか、と半分逃避にも似た考えを巡らせていたルークは、自分のことだと気付いて同じようにオロオロし始める。

「え、あのっ……れ、レオナさん、この人……えっと、人？なのかな……？」

動揺を隠せない様子のルークに苦笑し、レオナはとにかく落ち着くようにと諭す。深呼吸を数回してやっと落ち着いたルークだが、未だに鼓動が大きくなっているのを感じていた。恐怖はない。冷や汗もかいてはいない。驚き、それだけなのだ。

相手もレオナに頭を撫でられると、すぐに落ち着きを取り戻したようだった。しかし、人見知りの性格らしく、レオナの持ってきたランプの影に隠れつつ、こちらを窺うように顔だけを出している。

レオナは先にルークに説明することにした。

「彼女はメニカ。ブラウニーという種族の、妖精よ」

「……あ、妖精……？」

ルークはどう反応したらよいものか分からず、首を傾げた。妖精を疑ったわけではない。だがここにいる茶褐色の毛むくじらの物体を目の前にして、ルークの脳裏には先に絵本で見る、羽根のついた小人のような想像が浮かんでいたのだ。

それを察したのか、レオナは微笑んでメニカと呼んだ妖精をランプの前からひきずり出した。また慌てて隠れようとする姿に、やっとな愛らしさが湧いてきた。たしかに茶色の毛に覆われていて何処かの動物のような容姿だが、くりくりとした瞳が人のそれとは変わらない。

「これがもう1つの理由よ。貴方が『見える』人だから。何かあったときに助手が足手まといじゃいけないでしょう？」

やっと納得したように頷く少年にレオナは微笑んだ。ようやく妖精に慣れてきたルークは、好奇心旺盛にティーカップの陰に隠れたメニカを見つめている。

「……最初は驚いたんですけど……よく見ると可愛いですね」

何の下心もなく、素直にそう言ってレオナを見上げるルーク。

「可愛い妖精だけならいいんだけどね……」

『なあんだよ、それって俺様へのあてつけか？レオナ』

メニカを眺めようとティーカップを覗き込んでいたルークの頭上を右から左へと声が移動していった。ふと、ルークは頭上を見上げる。丁度レオナの目の前に、赤い物体が行き来していた。

それは一見、火の玉のようにも見えた。だが、それがどんな人の形を成していくうち、ルークはそれも妖精なのだと確信する。

「あら、トリクは格好良いつて言われるより、可愛いつて言っ欲しいの？」

蜻蛉を捕まえるようにその赤い物体の前で人差し指で円を描くレオナ。人の形に変化した火の玉は胸を張ってこう答える。

『美青年に可愛いという要素は必要だと思わねえか？弟子』

そう答えた妖精はメニカよりはつきりと人の形をとっていた。赤い髪が肩まで伸びてはいるが、どうやら声色と自分の名称から推測すると男の子のようだ。赤と黒を主とした長衣のような服。

「あなたの弟子になった覚えはないのだけれど？トリク。こんな所をうろついているということは、書庫の整理は終わったの？」

『終わるわきゃねーだろ。客人なんて珍しいし、なによりセカンド・サイトを持つてるなんて愉快じゃねーか』

円を描いていた人差し指が、妖精の額に衝突する。

「……トリク？書庫をあんなに散らかしたのはどこの誰だったかしら？」

引きつった微笑みを浮かべて、衝撃を受けた妖精が落ちていく様を見つめるレオナ。床に落ちる寸前で舞い上がるように飛び上がった妖精が、逃げるようにルークの視界を通り過ぎる。

『お、俺様ちよつと用事が……』

そしてレオナの腕が、同じようにルークの視界に割り込んだ。

### 第1章3 地下書庫にて

鳩時計ならぬ鳥時計がガアという間抜けた声で鳴く。その頃にはレオナもルークも夕食を済ませ、世間話などに花を咲かせていた。あまり山を降りていけないというレオナに街の話や、最近の王都の様子を説明する。

ルークの話を聞きながら、レオナはこの少年の思考能力の高さに感心していた。王都で拳がっている政治や貿易の問題もよく理解しているように思える。洞察力がある、ということも会話の中から見いだした。

それに、未知の知識を得るのが面白いらしい。

「あ、そういえば、さっき言ってた『セカンド・サイト』ってなんですか？」

トリクと呼ばれていた妖精が本を両脇に挟み、頭に一冊載せ、部屋から部屋へと行き来している。レオナに片づけるまで夕食抜きを言い渡されたトリクは、先程から恨めしそうにこちらを眺めつつ、本の片づけに徹していた。

それを笑顔で眺めていたレオナが振り返る。

「ああ……『セカンド・サイト』というのは、『見える』能力のことよ。妖精や、精霊、幽霊や、神様……色々ね」

「……あ、そうか、だから僕にもメニカさんやトリクさんが見えるんですね」

納得したように頷くルークに最後の本を頭に載せていたトリクが顔をこちらに向けた。本を落とさない絶妙のバランスを保ち、ビシ

つと指を差す。

『その少年、「トリクさん」じゃなくて「トリク様」と呼べ』

「あ、はい」

「……ルーク、あんなのは別に呼び捨てでもいいわ」

ここぞとばかりに口を挟むトリクを一瞥し、ルークを諭したレオナは烏時計の針を見た。丁度部屋を去ろうとしていた小妖精に言う。

「トリク、終わったらルークを部屋に案内してあげなさい。今日は疲れただろうから」

『お、それじゃ少年。これを戻すついでに連れてってやる』

こつち来い、と手招きするトリクに、ルークは椅子を引いて立ち上がった。おやすみなさい、と頭を下げ、トリクの後を追う。部屋を出る寸前、振り返りルークの名を呼んだレオナが微笑んで問いかける。

「明日、一度街の方に降りてみるから……案内をお願いするわ。いいかしら？」

振り返ったルークも笑顔を返して頷いた。

「はい！」

「……えっと、書庫ってどこ？」

廊下の灯りの影になって薄気味悪く突き当たりに存在する1つの扉。トリクが行き来していたため、開け放しとなった部屋の奥は真っ暗で何も見えない状態だった。廊下から差し込む光で見受けられるのは、階段のようなものが、下まで続いていることぐらいである。ルークの声にトリクが羽根を止めた。落下しないのが不思議だが、どうやら羽根は前進するためにあるものらしい。

『こっから下だ、下。地下に書庫があんだよ』

そう言つと灯りもなしにトリクは暗闇の中に潜り込んでいく。すると数秒も経たないうちに階段が赤い炎に照らされた。正確にはそれは炎ではなく、トリク自身の体が光を放っていた。

「あ……！」

赤い髪が一層真紅に輝き、その容貌はまるで火のように辺りを明るく照らす。

『修道士のランタンって知ってつか？俺様はその種族だからよ』

手招きするトリクに安心してルークは階段に足をかけた。空気の流れが全くない地下へと続く螺旋状の階段はまるで何処かの城のようにも思える。

足下を照らしながらゆっくりと階段を下っていくトリクに尋ねてみた。

「それって森とかで人を迷わせる火魂のことだよな？あれって妖精がやってることなの？」

『まーな。俺様はそんなガキ臭えことしねーけど』

と手を振ってみせるトリク。ルークは動くたびに揺れる光を見つめながら、ふと足を止めた。眼下に広がる広い空間。地下なので窓はないが、これほど大きな書庫を見たのは、隣町の図書館以来かもしれない。

「うわぁ……。凄い広い書庫……」

『マトモな本そろってりや、まだ良いんだけどな……』

螺旋の終わりまで辿り着いたトリクは、本棚と本棚の間を照らすように浮遊し始めた。光を追って1つ1つの本棚を眺めるルークは背表紙を眺めつつ、また感嘆の声を漏らす。

「『世界の占術』、『3大魔術』、『商業の歴史』……色々な本があるんだね」

『婆の趣味のもんをピンからキリまでな。ここなんか見てみるよ、  
「王都殺人事件下町旅情？」東の大海に沈んだ殺意と女的情熱』  
……何のこっちゃ』

ジャンル別に分けられた本棚の間を縫うように歩き回りながら、トリクは1つの本棚の前で羽根を止めた。頭に載せていた本を手に取り、本棚の一番端へと浮遊していく。灯りの移動と共に後をついていくルークもまた、その本棚の奥へと歩いていく。

『これは、ここか……よし、片付け終了』

間の空いた場所に埋め込むように本を押し入れ、腕をまわしつつ振り返る。

『さーて、さっさと部屋行って、夕飯を……』

トリクが振り返ると、ルークは一定箇所に残まっている光を使って、一冊の本に目を通していた。真剣に文字の羅列を眺めているルークに、トリクは本を覗き込む。光が一層強まって、文字がはつきりと光に照らし出された。

『……なんだ、妖精の国の地図か』

「そういえばレオナさんも言ってたけど、妖精の国って……？」

肩に乗っていたトリクに尋ねると、トリクはこちらを見上げて指を差した。人に自分の知識を披露するのが楽しいのか、自慢気に胸を張って答える。

『この世界にあるのは、人間の国だけじゃない。妖精の国もあれば、巨人の国だってある。……と、まあ、それはいいとして』

言葉を切ったトリクはご満悦のように空中を飛び回る。天井近くから照らされたせいか、書庫全体に修道士のランタンの灯りが行き渡った。

『妖精の国ってのは、俺達妖精の故郷みたいなもんだな。人間が集落をつくるのと同じ。……ただ、人間の世界にそれは存在しない。異空間とかいうやつだ』

「じゃあ、妖精にとっては人間の国が異空間になるんだね」

『ピンポン、その通り。けど人間と妖精とで全く違うのは、妖精は人間が見えるってことだな』

本棚の上からこちらを照らすトリク。ルークはその光で手元の文字を見つめた。地図のような絵の傍らに、補足のようなものが書き込まれている。

『ま、食べるモン食べて、寝るときは寝て……人間も妖精も同じこととして暮らしてるけどな』

「へえ……あ、じゃあトリク。ここに書かれてるこれは……お城？」

天井からの灯りに照らし出された1つの印。誰かが手書きで書き加えたかのようにそこには赤い走り書きがしてある。文字の形をしているが、崩されたように走り書きされていて、ルークにはとても読めない。

『あー、中央のやつだろ？そりゃ、王の城だ。もつとも、妖精の国にはご大層な貴族の屋敷もあるんだけどな。あれは半分城だ、城。馬鹿デカいしなー』

「城……つて、これくらい？」

と本棚を指差すルークに、トリクが天井から落下した。床ギリギリの所で衝突を回避すると、浮かび上がってまたルークの目の前に浮上してくる。急に目の前に来た灯りに、ルークは眩しそうに目を細めた。

『馬鹿言うな、俺様サイズじゃねえっての！妖精は小妖精だけじゃないんだぞ』

本棚に書物を戻したルークに、トリクは階段へと後戻りしながら怒ったように光を強めた。あまりの眩しさにルークは一定距離を置いてその後についていく。

『人間くらいの大きさの奴らだっているんだ、俺様は小妖精だからこれくらいの身長だけだな。これでも小妖精ん中じゃ足も長くて、長身で、スマートでハンサムで……』

「人間くらいの大きさ？」

階段に足を掛けつつそう問いかけるルークに、紅の光は振り返って溜息を吐いた。

『お前今、美青年の主張を流したな……』  
「へ？」

トリクは呆れ返ったような表情を向けて、光の強さを適当に変える。足下が照らされるようになったルークはトリクの隣を歩きながら、螺旋の階段を登った。

『ま、そうゆう奴らはあんまり人間の国には来ないんだけどな』  
「そうなの？」

問いかけるルークに、トリクは大袈裟に溜息をついてみせる。

『お前な……。妖精がそこら辺にぽこぽこぽこぽこいたらセカンド・サイトの奴には 見えるだろ？見たことあるか？』

トリクの呆れた表情を目の前にして、ルークは首を横に振った。

「うつん。僕、妖精見たのトリク達が初めてだから」  
『だろ？ま、お前、妖精の中で一番の美青年の俺様を最初に見たのは幸運だな。なんてったって俺様は足が長くて、長身で、スマートで、モテモテで……』

「あ、出口！」

廊下の灯りの元へと駆け出すルーク。自慢気に美青年の主張を繰り返していたトリクは、また途中で会話を流され、不満を爆発させ

て叫んだ。

『……だからルーク！俺様の主張を流すなーっ！！』

あとでレオナから煩いとお叱りをくらったのは言うまでもない。

客人用の部屋は1階の乱雑な状況とは異なり、最低限の家具に囲まれた質素な部屋だった。蜘蛛の巣が張っていることくらいは覚悟していたルークだったが、どうやらメニカが夕食後に片付けをしておいてくれたらしい。ベットとテーブル、そして棚。相変わらず、理解不能な書物が並んでいたけれど、それはルークの好奇心をかき立てた。

ベットの横に位置する窓にはカーテンがされていて、捲ると光1つない暗闇があたりを覆っていた。見上げた空で朧気な月が雲に隠れようとしている。

『そんじゃ、俺様はさっさと夕飯食いに行くからな』

「あ、うん。ありがとう」

トリクは小さな手でドアノブを引っ張り、扉を閉める。その様子を見守って、ルークはまた部屋の隅々を見渡した。そして先程から目に付いていた本棚の、一冊の書物を手にする。

「なんだろ……読めない」

本棚は本の大きさにあわせて5つの段があった。その中で、丁度

ルークの目の前に位置する棚に、1つだけ他と違う本が並べられている。

魔術、占術、歴史、地理……と資料のような書物の中、一冊だけ他とは異なる題名が目をひいた。その文字の崩し方はどこか先程書庫で見た妖精の国の地図に書かれていた文字と似ている。

「……妖精の国の本なのかな……？」

ルークは複雑な模様の描かれた表紙を開き、一枚、また一枚と捲つていく。読める文字が出てくるとなご期待していなかったが、その中に書かれている内容がとても気になって仕方がなかった。

理解不可能な文字の羅列はその並び方から何かの文章と、その説明のようなものだろうということまでは分かったが、それが何について書いてある本なのかは理解出来なかった。

「……て……め、ご……。ゆ、ゆれ？……やっぱり読めないや」

ルークは首を傾げながらそれを本棚に押し込むと、灯りを消し、ベットに潜り込んだ。寝転がりながらカーテンに手を伸ばすと、雲間から半分だけ顔を出した月の白い光が部屋の中に差し込んでくる。

「……おやすみなさい」

そう言うつとルークは毛布を肩まで引つ張り、目を閉じる。山脈を歩いてきた疲れか、睡魔が襲ってくるのは早かった。眠気に思考が沈む間際、ルークの頭の中にあの理解不可能な文字が浮かぶ。

けれどそれに何の答えを見いだすこともなく、ルークは眠りに堕ちた。街の喧噪から遠ざかった辺境は虫の音と風に揺れる木々の葉擦れの音しか聞こえず、彼の眠りはゆっくりと深まっていった。

天の目の如く光揺れ  
幾許清き風は吹く  
千の護りと証をもつて  
汝 扉の鍵とせん

氷雨の降りし国なれば  
亡者行き交う、刻苦の地

紅ひ薫る、誘いの地  
心その場に 許すべからず

真の未知を望みしものは  
答えよ、扉を開くため

鍵を唄うは 眠りの精  
子よ、この言が鍵なれば

忘ることなく 汝の中に

## 第2章1 不穏な影

『ほー、あれがアルティイの港街か』

額に手を当てて眼下から彼方まで続く情景を眺めていたトリクが、そんな声をあげた。レオナ達がルークの案内で家を出たのは翌日の早朝。シュリンク山脈を下るのは前日ルークが登ってきた時よりも早かった。早めに出発したせいもあったが、やはり登るのと下るのでは大きな差があるようだ。

トリクに続いて同じ風景を目にしたレオナも、ルークを振り返り微笑む。

「話には聞いていたけど、結構大きな街ね」  
「ありがとうございます。……メニカも来たらよかったんですけど」

メニカはセレスが帰ってきた時の為、家に残ることになった。ルークが何度か誘ってはみたものの、昨日と同じようにオロオロされただけだった。残念そうなルークの物言いに、トリクも街から視線を外し、ルークを見る。

『こんな人間の多いところに連れてきたら、ショック死するぞ』  
「そうね……それにブラウニーは元々家の中で過ごすから、あまり外に出るのは好きじゃないらしいわ」

レオナに諭され、ルークは仕方なさそうに頷いた。

『つと、それより……』

いつの間にかトリクがルークの右肩に乗った小妖精はご機嫌なようすで人差し指を突きつけてきた。ルークは首を傾げる。

『お前、いいとこのボンボンなんだろう？お持て成しは当然だからな  
ー』

妙に胸を張って客人気取りをしているトリク。とりあえず素直に頷いてから、ルークは1つ疑問に思った。

「うん。……あ、けどトリクに何を出せばいいのかわからないよ」

トリクの様子に呆れ返ったレオナは、頭を押さえて溜息をつく。  
そしてルークに言う。

「ルーク。そこら辺のミミズでいいわ」

「えっ？トリクってミミズ食べるんですか？」

疑問に思うこともなく素直に信じ込んだルークに、トリクは思わず肩から滑り落ちそうになった。レオナへの怒声も込めて叫ぶ。

『誰があんな酸っぱいもん喰うか！！』

「……ミミズって酸っぱいの？」

いつの間にかミミズの味についての論争が繰り広げられる中、レオナは1人街の風景を見下ろしていた。特にこれといって物珍しいものは見あたらなかったが、レオナの蒼い瞳は、吸い寄せられるように住居区の小さな丘に向かっていた。小さく見える人のような影。  
どうやら子供達らしい。

いつの間にか黙り込んでその丘を見つめていたレオナ。涼風が纏

めた髪の一房を弄び、海へと還っていく。

そんな中、彼女の思考を断ち切ったのはルークの勘違いにより、そのイメージが崩れかけようとしているトリクの悲痛な声だった。

『レオナ！こいつの天然、どうにかしてくれ！！』  
「……………」

無言で坂道を下り始めるレオナを、トリクが急いで追う。その更に後ろから、ルークの声が追いかけてきた。

「それじゃあトリク、一体何出せばいいの？」  
『頼むから食えるもん出してくれ！！』

2人の食べ物論争は、街に降りるまで延々と続いていた。

潮風の薫りと、東の大海から吹き付ける涼風。まだ蒸すような暑さが残る残暑の太陽の下、商店街の人通りはピークをむかえていた。ルークの言葉ではこれでも失踪事件の噂によって街に立ち寄る人の数は減っているらしいが、それでも貿易港として栄える街は活気立った賑わいを見せている。煉瓦造りの商店街の風景と石畳の道は残暑の暑さに逃げ水を浮かび上がらせていた。大通りを少し横道に逸れると、日陰になる場所に布と細い木々で組まれた簡単な店の並ぶ市場のようなものも見受けられる。

街の中心部には時計台を囲んだ公園があり、人工的に造られたものらしい池では海猫が水浴びをしていた。その横を通り過ぎ、居住

区内に入った3人はそのまま真っ直ぐに路地を歩いていく。

「こっちは割と静かなのね」

「はい。だいたいここら辺の人は工業区で働く人か、商業区で商いをしている人達だから、昼間は留守なんです」

先に立つて案内をするルーク。つまらなそうにその頭の上に乗って肘をつくトリクが辺りを見回し、呆れたように声を上げた。

『これじゃ、泥棒天国だな』

「けど、ちゃんと見回りしてくれる人もいるんだよ」

そう言うところルークはまた歩みを進めた。レオナも時折居住区の様子を眺めては足を止めることが何度かあった。珍しいものでもあるのだろうか、とルークはそれ位にしか考えていなかった。先を行く彼には、レオナの表情が見えていないのだから。

そんな折、トリクが一軒の家を見上げて感嘆の声を上げた。足を止めていたレオナも、小妖精の声に視線を移す。

その家は、広い庭を持つ大きな家だった。家、というより屋敷と形容したほうが相応しいかもしれない。庭を囲むように立ち並んだ大きな杉の木々が真緑の葉を太陽に向け、枝を伸ばしている。赤煉瓦で組まれた家の外観はとてもスッキリとしていて、2階建てにバルコニーのついている様子はレオナも感心した。

『でっけえ家だなー』

「そう？ありがとう」

トリクの言葉に即答で応えたルーク。レオナはそれで全てを理解し、トリクは逆に石になったかのように固まってしまった。ギギギ、

と固まった頭をレオナの方に向けるトリク。レオナはその様子に息を吐いて言った。

「ここが依頼人の家、というわけね」

門の前まで続く鉄の柵が杉の外側をまた囲むように立ち並んでいる。ルークはもちろん、レオナでさえも手の届かない大きな柵に、トリクは器用に右の口元だけを引きつらせた。

『……ここまでボンボンだったのかよ……』

思ってもみなかったというようなその発言にレオナは同じように屋敷を見上げた。

「よく言うじゃない。お金持ちの家の子供はおっとりした性格になるって」

『……俺様納得』

異様なまでに納得して頷いているトリク。その会話を聞いていたルークはその様子に笑いながら自分の家を見つめてさりとら言った。

「あ、でも僕、元々孤児院の子供だから」

頭上に乗って胡座をかいていたトリクが、微かにバランスを崩した。レオナは表情を変えることもなく、ただ黙ってルークの後ろを歩いている。ルークもいつも通りの笑顔を浮かべて、入り口から出てきた人物に手を振った。

「あ、父さん！」

駆けだしていく後ろ姿を見つめながら、空中に浮遊するトリクが羽根を動かして言った。

『孤児院出の人間って荒れるもんだと思ったんだけどな』

「……書庫の本の読みすぎじゃない？」

そう言って軽く息を吐くレオナ。その肩に乗ったトリクも首を鳴らして溜息をついた。義父と楽しそうに会話をしている少年の姿を見つめながら、ゆっくりとそちらに向かって歩き出す。

ふとレオナは背中に腕をまわし、1つに結った髪をしっかりと結び直しながら、目を細めてあたりを見回した。

『……で？気配くらい気付いてるんだろ？弟子』

トリクは小声でその表情を見上げた。レオナは視線を合わせず、平然を装って返答する。ピンと張るような空気の緊張を肌を感じながら。

「もちろん。さっきから警戒されててはつきり言って気分が悪いわ。」

思い出したようにこちらを振り返って自分の名を呼ぶルーク。レオナはその横に並んだ彼の父に会釈1つして歩みを再開した。

豪勢な家は内部も豪勢だと、トリクがもらったのも仕方がない。天井の高い廊下を案内されながら、レオナはそう思った。

小綺麗なまでにすっきりと並べられた家具には高級感が漂い、壁に掛けられた絵画や、いたる所に存在する花瓶には生き生きとした花が生けられている。時折窓の外からは庭に造られた花壇や杉が揺れる風景が見受けられ、太陽の日差しが日だまりとなって存在していた。

レオナは先を歩くルークと義父の後ろ姿を眺めながら、改めて2人が本当の親子ではないことに納得していた。

（確かに……15、6の子供がいるにしては若い父親ね……）

けれど先程簡単に紹介された時の印象と雰囲気を見ると、どことなくルークと同じものを持っているように思えた。やはり子供は育つ環境によってその性格が形成されるのかもしれない。反面教師という例外もまた存在するが。

通された部屋は客人を迎える時の客間らしかった。長方形のテーブルを囲むようにソファが並べられている。自分の古家と見比べるとかなりの差があるとレオナは内心溜息をついた。もちろん、あの家があんなに散らかっているのはトリクが原因なのだが。

（……片付け嫌いはトリクだけじゃないけどね……）

「……レオナさん？」

振り返ったルークが首を傾げた。顔を覗き込んでくる心配そうな表情に、レオナは我に返る。どうやら部屋の扉の前で立ちつくしていたらしい。

「……何でもないわ」

と、とりあえず首を振り、町長に勧められたソファに腰を下ろす。

暑いからと腕にかけて持ってきたローブをたたみ、隣に置く。その様子を見ていたルークは義父に言った。

「それじゃ父さん、僕飲み物持ってくるよ」

席を立つたルークに、レオナの隣を浮遊していたトリクが続く。どうやら依頼内容の確認という一番大事な仕事が面倒臭いらしい。ルーク達が部屋を出たのを確認して、レオナは姿勢を正した。

「それでは、依頼の確認をさせていただきます」

広いキッチンは流し台もすっきりと片付けられていて、逆に生活感がないようにも思えた。何よりそれは部屋を散らかすことが十八番のトリクの言葉だが、ルークにとっては日常のキッチンの風景である。広く光彩を取り入れる為の窓。そこから差す光は暖かい。ポットを火にかけたルークはお湯の沸く短い間、落ち着かないトリクの様子を振り返った。

「そういえば、本当に父さんにはトリクの姿見えないんだね」

『…………あ？』

思い返せば門の前でレオナさんの紹介をしていた時、義父の視線は決して隣を浮遊する小妖精に向かったことはなかった。逆にトリクの方を目で追っていたルークは父に何をキョロキョロしているんだ、と聞かれたくらいである。

『まあな。セカンド・サイトを持たない人間には俺様は見えないし、あと俺様が見える奴つてのは……』

片付けられた場所だと落ち着かないのか、テーブルの下を旋回していたトリクの声がそこで止んだ。首を傾げたルークは、しゃがみこんでテーブルの下に視線を向けた。そこには蛇に睨まれた蛙のように固まって動かないトリクの姿と、その目前で彼を覗き込んでいる女の子の姿。夏用に作られた丈の短めのワンピースを着ているにもかまわず、テーブルの下で膝を抱えている。

「リナ？こんな所で何して……」

『る、ルークっ！？こ、これもしかして……』

何故か後ろ姿でも分かるくらい冷や汗を流しながら、トリクが口だけ動かして言う。その奇妙な動作に女の子はまた顔を近づけた。耳の上の高い位置で結んだ2つの黒髪が揺れる。

「え？あ、うん。僕の義妹。2人いるんだけど、下の妹の方だよ」

『2人もいんのかよ！？』

青ざめた顔のトリクに、とりあえずルークはテーブルの下に潜入を続ける義妹を引きずり出した。僅かだが、抵抗を見せる様子に兄であるルークは首を傾げる。

「リナ。何してたの？」

視線を同じ高さにして、ルークは首を傾げる。小さな手でトリクを指差す様子に、指差された本人は挙動不審に叫んだ。

『なっ、なんだよ』

「……トリクを見てたって言いたいみたい。けど、あれ？リナには見えるの？」

しっかりと頷いたその表情。無表情に近いが、どうやらそこには兄にしか分らない義妹の気持ちの表れがあるらしい。大きな漆黒の瞳がじつと兄を見つめている。トリクは逃げるようにキッチンを出ようとしている。

「どうしたの？トリク」

『ガキはセカンド・サイト持つてなくても俺達が見えるんだよっ』

小声で自分に話を振るなど主張するトリク。廊下への扉に手をかけた瞬間、不意にドアノブが反対側に引かれた。妙な奇声が響いたと同時に、小さな歓声があがった。

リナと同じ黒い髪。1つに結った黒髪が揺れる。

「リナみつけ！」

こちらに指を差した同じ瞳、同じ顔。同型の少女だが、こちらは満面の笑みを浮かべて人懐こい雰囲気を出している。最初は妹の姿しか目に入っていなかったらしいが、その隣にいる兄の姿を見つけると先程の何十倍もの笑顔を浮かべてその腕に抱きついた。

「兄様ーっ！」

「ただいま、リカ。隠れんぼしてたんだね」

傍らでルークの服を掴んでいるリナに謝り、2人の頭を撫でる。同じ外見から分かる通り、リカとリナは双子である。もちろん、この2人は義父と義母の実子。歳は今年で5歳になる。

「兄様おみやげー。おみやげはー？」

一生懸命お土産をせがむリカ。双子の姉、リカは妹とは違いとても人懐こく、好奇心旺盛である。妹のリナを後ろに従え、何処までも遊びに行く冒険好きな性格。父はいつもリカはルークに似たところあることに口にするのだ。

「お土産……山だからお土産はないんだけど……」

困ったように笑う兄に、助け船を出したのはリナだった。掴んでいた袖を引き、そろりそろりとキッチンを去ろうとしていたトリクを指差す。その指の示す方向にリカの視線が向いた瞬間、彼女の笑顔が爆発したのを兄は感じた。家全体に響くような歓声が響き渡るのと同時に、トリクの絶叫が後を追うように木霊した。

ルークは頬をかいて喜びの声を上げている妹達を見つめる。もみくちゃにされているトリクの様子に困ったような表情を浮かべた。先程から助けを請うトリクの視線が痛いくらいに伝わってくる。とりあえずルークは後ろで特有の高音を鳴らし始めたポットからティーカップにお湯を注ぎつつ、義妹達を諭すように言った。

「リカ、リナ。つぶしちゃ駄目だよ？」

元気良く返事を返したリカと軽く頷いたリナを横目に、ルークは盆に乗せた3人分のカップを手にキッチンを出ていく。トリクの叫びがその後ろから響いた。

レオナの調査依頼についての確認が終わったのは日が落ち、時計

台が6時の鐘を響かせた頃だった。こんな時間に宿が空いているはずもなく、レオナはルークの家泊まることとなった。義父と義母の計らいで、好意を受けることにしたレオナだが、トリクは最後まで猛反対を繰り返していた。

「兄様、お姉ちゃんは何妖精さんは？」

夕食後の客室前でそうせがむ妹達にルークは困ったような表情を浮かべて事情を話していた。どうやら妖精と魔術師という子供の好奇心を撥る言葉に一番敏感なリカが興味を持ったらしい。それだけでなくとも夕方、2人のいいように遊ばれていたトリクはもう双子専用玩具と化していた。

「今すぐく大事なお話してるからね、今日は2人とも寝よう？もうそろそろ寝ないと、母さんに怒られるよ？」

夕食時はルークが妖精の事を口止めたため、双子は妖精については何も言わなかった。ただ、あまりにも2人がご機嫌なのを義母に悟られ、危うく何があつたか口にしそうになってしまったのだが、ルークの言葉を聞いたリカは不満そうに頬を膨らませた。この状態になってしまえば、もう反論の術がないという証拠。ただ、隣にいるリナを覗けば。

リナはリカと違って奥手だが、頭の回転は姉より速い。ルークの気付かないうちに姉をけしかけ、凄いことをやらかしてしまうのもリナなのだ。

ルークの予想通り、リナはふと無表情に首を傾げると隣にいた姉の肩を叩き、何かを耳打ちする。その様子を見たルークはこの攻防が延長されるのを予感し、頭を抑えた。

すると言葉に詰まっていたリカが顔を上げる。

「それじゃ兄様、お姉ちゃんと妖精さんにおやすみなさい言わなきゃ！開けて開けて」

「え……あ、そ、それは……」

リナはどうやら、姉に『寝る前の挨拶をするから』と理由付けすることを薦めたいらしい。我が妹ながら、そんな所をついてくるとは思っても見なかった。言葉に詰まるルークに、妹達の声は続く。すると、その後ろでドアの開く音がした。

「……あ、レオナさん」

ルークがそう呟くのと同時に、双子の歓声があがった。期待の表情でこちらを見上げる2人にレオナは苦笑する。どうやら先程までの会話が部屋の中まで筒抜けだったようだ。

「お姉ちゃん、魔法見せて魔法ーっ！」

目の前にいるにも関わらず必要以上に大声を出すリカの隣で、魔法に興味を持ったらしいリナが力強く頷いた。表情は違えど、同じ顔が寄せる期待の目にレオナは微笑んで言う。

「私はまだ弟子の立場だから。そうね、それじゃあ……」

レオナはしゃがみ、視線を双子と同じ位置にすると、目の前で人差し指を回した。弧を描くように空中に光の線が出来る。すると指はその中に見たこともない文字を描き出した。まるで半分絵のような、不思議な文字。それが金色に光った瞬間、レオナは指を鳴らした。

（……っ？）

あまりの眩しさに目を瞑るルーク。そしてまた同じ場所に視線を戻した時には、金色の線も文字も、何も見あたらなかった。変わったことといえ、リカが目を擦り始めたことくらいである。

「……？」

首を傾げるルーク。先に異変を見せたのは意外にも策士のリナだった。カクン、と首を下に下げ、何かに気がついたように顔を上げる。先程見せた珍しい期待の表情も今は見えない。ただいつもの無表情から少し目を細め、よろよろと姉の服を掴んだ。その動作を何回か繰り返し返しているうちに、今度はリカが女の子らしからぬ大口を開けて欠伸をした。

そして目を擦ると、ルークを見上げる。

「兄様……ねむい……」

「えっ？」

先程まであんなにはしゃいでいた2人に、ルークは思わずレオナを見つめた。微笑んで人差し指を口元に持ってきたレオナは双子の頭を撫で、背中を押す。

「もう寝る時間でしょう？おやすみなさい」

「おやすみなさい……」

「……なさい」

ゆっくりと廊下を自分達の部屋の方へと歩きだした義妹達の後ろ姿を見つめ、ルークは小声でレオナに言った。

「レオナさん、今のって？」

「眠りの魔法よ。明日の朝まで解けないわ」

立ち上がって部屋の中へと入っていくレオナを追って、ルークも部屋へと入っていった。扉を閉めると、レオナがベットの前で呆れたような視線を送っている。その視線の先には避難するように枕の下に潜り込んでいるトリクの姿。

『あつ、あいつら本当に行つたんだろうなっ!?!』

「うん。もう寝るって」

呆れて物も言えないレオナの代わりにルークがそう口にした。枕の下から顔だけ出している様はとても妙だったが、レオナはそれを完全に無視してカーテンのされた窓へと足を勧める。

『あいつら命拾いしたな……セレスだったら一発拳が……』

「そ、そうなの?」

トリクの軽口を信じ込みそうになっているルーク。けれど2人の会話を断ち切ったのは、顔を顰めたレオナの一言だった。

「嫌な空気ね……」

「えっ?……あ、暑いですか?」

レオナは首を左右に振った。険しい視線は立ち並ぶ住居区の片隅に向けられている。枕から出てきたトリクがルークの頭の上に乗って、レオナに言った。

『あの視線か?』

「多分……けど、そこら辺にいるようなアンシーリィ・コートが魔術師に気付くかしらね」

カーテンを閉め、ゆつくりと客室の椅子に腰を下ろしたレオナが溜息をつく。テーブルに肘をつき、口元を押さえるようにして何かを考え込んでいる様子にルークはトリクに向かって疑問の声を上げた。

「……トリク。『アンシーリイ・コート』って何？」

頭上で腕を組むトリクは説明しづらいのか、目の前まで降りてきて説明を始める。

『妖精にはデカイ奴チビな奴……色々いるが、中には良い奴と悪い奴がいる。人間と同じだな？』

「うん」

「良い妖精をシーリイ・コート、悪い妖精をアンシーリイ・コートと呼ぶのよ」

自慢の知識を披露しようとしていたところを割り込まれ、トリクは気が抜けたように落下していった。だがそれを気にせず、ルークはレオナに向き直る。

「悪い妖精……ですか？」

「簡単に言えば、の話ね。妖精の国ではそう言うらしいわ……それよりルーク」

椅子に深く腰掛け、現在の失踪した人間の数、名前、特徴を記した紙を眺めながら、レオナがルークに言う。2つあるベットの片方に腰掛けたルークはそこからレオナの言葉に応じた。

「失踪者の数と失踪場所、あと失踪者の特徴で重なる点とか割り出せるかしら？」

「あ、はい。でも、特徴の方は……」

口ごもるルーク。首を傾げるレオナの視線が、発言を促している。いつの間にか開き直ったらしいトリクも、ベットのに乗って顔を覗き込んでいる。

「……以前聞いた噂、なんですけど……。なんだか失踪する人って、茶髪の人が多いらしいんです」

『はあ？茶髪？』

容易に予想できるトリクの返答に、曖昧にルークは首を縦に振った。

「この間失踪した雑貨屋の男の子も……たしか茶髪だった気がするし……」

ルークは何かを思い出すように天井を見上げ、商業区の人達が王都の調査団派遣依頼に来た時のことを思い出した。雑貨屋の末っ子は確か茶色の短髪だった気がする。よく義妹達の冒険に引っ張り出されては怖い思いをして泣いて帰ってきたことがあった。腕白坊主をも泣かせる町長の娘達は、子供達の間ではガキ大将的位置を確立しているらしい。

「リカとリナもよく母さんの言いつけを破って遊びに行ったりするんですけど……そうゆうことは一度もなかったし……」

「そういえば彼女達は黒髪ね」

「はい」

調査書を片手にその会話を聞いていたレオナは、紙の端に小さく何かを書き綴った。どうやら今のルークの証言を一応記述しておい

たらしい。そして小さく溜息をつく、レオナはやっとルークに視線を向けた。

「明日、街を回ってみたいんだけど……いいかしら？」

「はい。あ、それじゃあ、僕もそろそろ……」

立ち上がったルークを見つめ、もう一度調査書に視線を戻したレオナは、彼が自分の目の前を通り過ぎる瞬間、ふと顔を上げた。

「ルーク。ちょっと待って」

「……？」

足を止めたルークに、レオナは立ち上がる。不思議そうに見上げてくるルークの髪に触れ、その顔を覗き込むように言った。

「……ルーク。貴方も茶髪よね？」

「……あ」

忘れていた、と言わんばかりの表情に、レオナは軽く頭を押さえる。呆れたように溜息をつくとその少年の顔を覗き込んで言った。

「貴方もまだ大人と言うには早いわ。一応だけど……」

目を瞑らせるようにレオナは左手で視界を覆い、右手でまた先程のような崩れた言葉を空中に書き綴った。指先がなぞる透明な空気が凝縮されたように光を放ち、金色の粒子が銀色へと変化を遂げた。

「……『天在り地在り光在り、闇は乗じて光と在り』」

ルークにはレオナの言葉しか聞こえなかった。突然の出来事に一

瞬驚いたけれど、レオナの言葉は自然と体の中から力を抜き取っていく。それはまるで眠りと目覚めの狭間を彷徨うような、虚ろでいて心地の良い感覚。

『人は神の世界に在り、神は人の上に在り』

凜とした声はその感覚を阻害するものにはならず、逆にルークを眠りの中へと墮としていくような、そんな気分にした。

『時の狭間に死角在り。消えた陽炎、目裏の隙間』

空中に浮かんだ文字が、いつそう光を増した。レオナは冷静に最後の文字を書き連ねていく。声に反応して光を放った文字が、眩しいまでに輝き始める。

『彼は誰、誰は彼、覚ゆる思い。闇に包まれ、死角に消えよ』

一瞬、目を瞑っていたルークの閉ざされた視界に、レオナの文字が見えた気がした。レオナの指が鳴る。それと同時にルークは一気に感覚を現実へと引き戻された。一瞬、眩暈がしてテーブルに手をつく。

『……18点。セレスならそう言っぜ。かけた相手に眩暈起こさせてるようじゃ、ってな』

「馬鹿師匠の言うことなんていちいち気にしてられないわ。……ルーク？」

頭を押さえるルークを覗き込むレオナ。ルークは数回瞬きを繰り返してやっと顔を上げることが出来た。

「……あの……今のは？」

「ちよつとした目隠しの魔法よ。あそこにいる小妖精以外の妖精には貴方の姿は見えないわ」

頷くトリクを目にして、ルークは首を傾げた。感觸的にも、先程と何ら代わりはない。レオナを見上げると、微笑んで頭を撫でてくれた。

「朝までは解けないようにしてあるけど、何かあったら助けを呼ぶこと。分かった？」

「え？あ、……はい」

それじゃあ、と頭を下げたルークは廊下に出ると、とりあえず自分の部屋へと向かって歩き出した。廊下の窓からは明かりの消えつつある居住区の風景と、その先に聳える小さな丘の木々が風を受けて揺れる様だった。

時計の針はまもなく深夜の時刻を差そうとしている。

新月。月の無い夜に街を照らす明かりもなく、道もまた漆黒の闇に包まれ、その存在も消失する。何もかもが眠りについたかのように明かりを消し、闇に隠れる様は見慣れた風景。その闇に紛れ、1つの窓に薄明かりの火が灯っている。

男が腰掛けた椅子は彼の背を覆うように広く、部屋もまた同じように広く造られている。天井まで明かりが届かないのがその証拠だ。彼は椅子に肘をつき、1つ息を吐くと目の前で頭を垂れている女に言った。

「……まだ見つからぬのか」

女はぴくりとも動かず、同じ体勢のまま返答した。もう幾度かわわされてきた同じ言葉に相手の表情は顔を見上げなくとも分かる。

「……もう少しお時間をいただければ、と」

「そうか」

男の声は先程と同じように響いた。怒声ではない。けれどその言葉の奥には怒声以上の強烈な威厳と強い怒りが含まれている。女は肩に強い重石を乗せられたような強い緊張を覚えながら、口を動かした。

「……弟君が権力争いから脱落いたしました」

重い空気は、変わることなくそこに存在する。それは己が主君だからこそその威厳。誰も適うことはない。

「ああ、知っている。当然だろう、彼奴は食い気と小心……そして強欲の塊。かのような者を 周りが指示するはずはない。残るは三人となったか」

「弟君はこちら側の支持を約束いたしました……彼の手下も使いようによれば搜索の助力となるやもしれません」

「……分かった。そのことについては明日、私から彼奴に話しておこう」

男は窓へと歩み寄り、眼下に広がる闇の街を見渡した。鳥の鳴き声も、虫の鳴き声さえも、どこかへ消え去ったかのようにただ静寂を木霊している。揺れ動くこともない、影の森は静かにその存在を

気配ごと消え去り、まるでそこには何もないかのようにだった。

男は新月の闇を見つめる。

「もうすぐだ。あの月がもう一度その姿を闇の中に消えれば、私の願いが叶う時が来る……」

「はい。……もうすぐです」

女も口元をつり上げる。その為には、まだやらなければならないことがある。その想いを胸に、ゆっくりと立ち上がり、また頭を垂れた。

「それでは、私はこれで」

踵を返し、廊下へと足を勧めた。扉を閉め、窓の外の闇を見つめる。永久に光の裏に存在し続ける漆黒の闇を見つめ、もう一度主君の言葉を繰り返した。雲間から顔を出し始めた月の一欠片を睨みつつ。

「……あの月がもう一度闇の中に消えれば……」

## 第2章2 孤児院

快晴の青空に前日と変わりはない。ただ変化を問うとすれば、秋の気配が近づき、蒼天の空はいつもより高く、吹く風は涼風へと変わりつつあることだ。秋の装いが山から海へと下り、ふと見上げれば街道の木々も山吹に染まりつつある。

秋が近づけば街の活気もまた変わる。旬な物を先取りするように争う市場や、冬を前にして薪等といったものは飛ぶように売れる。ついこの間までの夏の様子を思い出しながら、ルークは1つ深呼吸をした。振り向いて後ろを歩くレオナに問う。

「レオナさん、行きたい場所とがありますか？」

今日は珍しく、傍らにトリクの姿はない。出かけるときに不幸にもリカとリナに見つかってしまった為、今日は家で留守番だ。

「そうね……。失踪者の詳しい話が聞けるとところで、出来れば子供が沢山いる場所かしら？」

「あ、それなら、丁度いい場所がありますよ！」

嬉しそうな表情のルークにレオナは笑顔を返した。どうやら、昨夜は何も変わったことは無かったらしい。一安心したレオナだったが、まだ気は抜けなかった。

気配は消えていない。今日も朝からまとわりつくような視線を感じ、目覚めたのだ。気分の悪いことこの上ない。とりあえずレオナはルークから目を離さないように、と彼の隣を歩きながら、彼の言う丁度いい場所に向かって歩き始めた。

「ここはかなり大きな街だけど……町長はどうやって決めているの？」

レオナは人通りの激しい大通りを見回しながらルークに尋ねた。ルークは人にぶつからないよう、気を遣いながら歩みを進める。

「あ、選挙があるんですよ。住居区、工業区、商業区の区長さん達を集めて……あ、こっちです」

道を右折し、少し細い路地へと入る。石畳の商業区は裏に入れば小さな石造りの家々が立ち並んでいた。窓から突きだした洗濯物の竿が生活感を漂わせている。反対側の家の窓からは植物に水を与える女性が見える。

ふとこちらに気付き手を振る様子にルークは笑って頭を下げた。レオナは辺りを見回しながら言う。

「それじゃあ1つの区に数人の区長がいるのね」

「あ、はい。区長さん達が代表して選挙するんですよ。選挙、って言っても王都みたいなしっかりしたものじゃなくて、街の中で推薦された人の中から選ぶんで……」

石畳の道を真っ直ぐに歩いていくと、階段が見えてきた。階段の両脇にも家が建ち並んでいる。山の中で暮らしていたレオナにとってはそれがとても妙な風景に思えて仕方なかった。

「それじゃあ、今の町長は人望が厚いのね」

足をかけ、一步一步上へと歩いていく。ルークは照れたように頬をかきながら、レオナから視線を逸らした。

「そ、そんなことないですよ。父さんが言うには、父さんの父さん……お爺ちゃんが町長をしていたから煽て上げられたらしくて」

どうやらここら辺の地形は小さな丘のようなものだったらしい。

全部上まで登りきると、眼下に街の様子が広がる。海が近い分だけ、前日に見た風景より綺麗に思えた。海岸のさざ波まで見ることが出来る。海を近くで見たことがないレオナは関心したように、その風景に見入っていた。

その様子を嬉しそうに眺めていたルークは、ふと後ろから掛かった声に現実引き戻される。

「あー！ルーク兄ちゃんだー！！」

「え……？……わぁっ！」

状況を把握しきれないうちに、ルークは足下に衝撃をうけた。遠くから助走をつけて飛びかかれたので、バランスを崩して後ろに転倒する。すると今度は沢山の子供達がルークの周りを覆うように抱きついてきた。

「いたた……ちょ、ちょっと、皆、待つて……」

「おや、ここ数日ここに来なかったもんだから、心配していたんだよ、皆ね」

後ろから聞こえてきた声にレオナとルークの視線が向かう。数人の子供達に囲まれながらこちらを見て微笑む1人の女性。白髪混じりの肩までの髪、そして笑い皺がレオナには印象的に見える。

「ルーシーおばさん！」

抱きついてくる子供達をなだめ、やっと身を起こしたルークが途端に言った。知り合いかと尋ねようとした瞬間、ルーシーの視線がレオナの方へと向いた。

「……おやおや、まあまあ……」

なにやら口元を押さえて驚いている様子に、レオナは首を傾げる。見ると幾人もの子供達の視線もこちらに向けられていた。それも何か笑いを堪えるような笑顔。両手で口元を押さえている子もいる。首を傾げるレオナに慌ててルークは弁解しようとした。だが、それより先に子供達の歓声があがる。

「ルーク兄ちゃんがカノジヨ連れてきたーっ!!」

「カノジヨ、カノジヨー!」

「えっ、ちょ、ちょっと待って、レオナさん、僕より年上……」

ルークの弁解も適わず、トドメにルーシーの微笑みと一言。

「年上なんて……ルークも大人になったのねえ……」

項垂れるルークとレオナの間を円を描くように子供達が叫び回っている。大体そうやって冷やかしてくるのは男の子中心だった。女の子達はルーシーの隣や後ろから見慣れない客人を覗き見ている。どうしたものかと顔を見合わせるルークとレオナ。

「……ところでルーク。ここは、学校か何か?」

先に口を開いたのはレオナだった。ルーシーの立つ横には門があり、奥にはルークの家より大きな建物が見える。庭には滑り台や砂

場といった公園のようなものが見受けられる。

返答しようとしたルーク。しかしそれより先に口を開いたのはルーシーだった。

「ここは『孤児院』。捨てられた子供の面倒を見る場所と言えば分かるかしらね」

微笑んでそう言う初老の女性にレオナは思い出したように周りを駆け回る子供達を見つめる。何だかよく分からない期待の視線がいくつもこちらを見上げてきた。

「ここ、僕がいた孤児院なんですよ。7歳くらいの時に父さん達に引き取られたんですけど」

「ああ……それで子供達がこんなにいるわけね」

レオナはそういういつの間にか自分の隣でスカートの端を掴んでいる男の子の頭を撫でた。ルークの妹達とさほど変わらない年齢に見える。するとまた子供達は何か面白いものを見つけたように孤児院の方へと走っていつてしまった。女の子とレオナが頭を撫でた男の子がその場に残る。

レオナは顔を見上げて、こちらを見ているルーシーに言った。

「失踪事件の依頼を受けてこちらに来た、レオナ・デイルと言います」

そう言つて頭を下げると、彼女は驚いたような表情を見せる。それはレオナがルークの『彼女』だと思いこんでいたせいばかりではない。

「あら……それじゃあ、貴女が魔女？」

口元を抑えたままそう聞き返すルーシーにレオナは頷いて、そして思い出したように弁解した。魔女、という言葉に怖がったのか、女の子達がルーシーの影に隠れようとしている。

「魔女というよりは魔術師に近いと思います。それに……まだ弟子なので」

怖がる女の子達を宥めるルーク。それを横目にレオナはそう言った。ルーシーはそれを見て微笑む。

「弟子でも依頼を引き受けてくれたのは嬉しいわ……私の所は子供達ばかりだからね、不安で。そういえば、自己紹介してなかったわね。私はルーシー・ファルデンス」

よろしく、と差しのべられた手をレオナも握り返した。その様子に安心したのか、女の子達も段々とレオナに寄ってくるようになる。魔女や魔法といった類はどうやら女の子達の方が興味があるらしい。

「……お姉ちゃん、魔法使いなの？」

活発そうなショートカットの女の子が1人寄ってきて、レオナを見上げる。レオナはしゃがみ込んで視線の高さをその子に合わせると、優しく微笑んで頷いた。

「そう。怖い？」

左手で頭を撫でてあげると緊張したような空気が和らぎ、彼女は笑った。レオナの首に抱きついて言う。

「……うつん、全然！」

その様子を見つめていたルークは、ルーシーと顔を見合わせ微笑んだ。女の子達の幾人かがルークの手を引く。中に行こうと誘っているようだった。

「レオナさん。中で話を聞きましょう」

ルークがそう言うと、レオナは頷いて立ち上がった。撫でていた手をとって、女の子が手を引く。引っ張られるようにして門をくぐったレオナはふと、先刻自分のスカートを掴んでいた男の子を振り返る。

ぽつんと取り残されたその子に、レオナは手を差し出した。

「一緒に行かない？」

そう言うと、男の子は一瞬不思議そうにこちらを見上げ、そして笑ってその手をとった。孤児院のひとときわ大きな歓声が、レオナを迎えてくれる。

海から吹き付ける涼風は少し強いが、今の時期には丁度いい。部屋から部屋へと通り抜ける風はレオナ達を通された場所にも心地よい涼しさを与えていた。椅子に座ったレオナとルークに女の子達が運んできた飲み物が出される。

「それで……どこから話せばいいのかしらねえ……」

テーブルの反対側に腰掛けたルーシーが窓の外で遊ぶ子供達を見つめながら、そう言った。レオナは持ってきた報告書を片手に、1つの資料に目を止める。

「確か、ライトという少年ですね。山へ遊びにいった途中でいなくなっただけと書いてあります」

ルークは山、という言葉聞いて首を傾げた。ルーシーに視線を向け、疑問を問う。

「おばさん、山って山の散歩コースのこと？」

「確か……そうだったと思うんだけど……」

曖昧ながらも頷くルーシー。ルークは首を傾げるレオナに、山の散歩コースについて説明を始めた。

山の散歩コースというのは、一ヶ月に2回程行く決められた散歩のコースらしい。海辺と山道で2つあるのだが、どうやらその少年は山道の散歩している時にいなくなったのだ。

「ああ、そうそう、確かライトがはしゃいで1人で先に行ってしまったんだっただけ」

飲み物に続いてお茶菓子を持ってきた女の子にルーシーはそう言った。先程の子供達より歳も幾分か上に見える女の子だ。ルークと5つも離れていないかもしれない。

女の子は一瞬首を傾げて、そうそうと首を横に振った。金髪を肩まで伸ばした、痩せ形の少女だ。

「たしかライトが曲がり道の向こうまで行っただんじやないっけ？ほら、あの奥へ行く方と、街に出る方と。間違うかも知れないって思っで、追いかけたんだけど姿が見えたらなかったんじやない？」  
「それじゃあ、その時その子は1人だったってわけね」

確認のためそう言う少女はこちらを振り向き、頷いた。どうやらその散歩に同行していたらしい。レオナはそれを聞いて、持ってきた小さな簡易地図をテーブルの上に広げた。ルークにそのコースの場所を聞く。

「えっと……たしか商業区の裏手だったから……」

ルークのなぞる道に印をつけながら、レオナはふと、とある場所で手を止めた。地図の上に1つだけ大きな空白を見つけたためだ。公園が何かかと思っただが、商業区の裏にそれはあり得ない。レオナは視線をルーシーに向け、疑問を口にした。

「ここは何ですか？」

「え？ああ……そこは丘。山から降りてくる時に見えなかったかしら」

「丘……」

レオナは前日、街へ降りるときに足を止めたあの風景を思いおこした。住居区と商業区の裏手の丘……1つだけ心当たりがある。確か昨日もあの辺りで子供達が遊んでいるのを見かけた。

何かを思いだしたようにレオナはルークに視線を向けた。

「ルーク。昨日言っていた雑貨屋の子供ってどこで失踪したか覚えてる？」

「へ？……えと、……あ」

ルークもまた思い出したように地図に見入った。今まで追ってきた散歩コース、その中で奥へ行く道に入れば、確実に『丘』へと辿り着く。そして、雑貨屋の三男坊が失踪したのも、ルークの記憶が正しければこの丘。

「そういえば雑貨屋の子だけじゃなくて、他の子もこの周辺で失踪した例が多いんですよ。昨日レオナさんに言われて調べてみたんですけど」

ルークは自分のポケットに入れていた小さな紙を取り出し、そこに書いていた累計を読み上げていく。場所にばらつきはあるが、それは大体その丘の近くで起こっている。

「ケイン、ハンス、マリー、あとファンも……」

「待って……ルーク、それって殆ど男の子じゃない？」

失踪者の名前を地図に書き留めていたレオナが、その手を止める。そして失踪者の名前を確認していくと、確かに女の子の名前は少ない。するとルークが傍らにいた少女に言う。

「マリーって確か、髪短い子だったよね？男の子みたいな感じで……」

すると暑そうに金髪を弄っていた少女は頷いた。

「うん。私男の子と間違っちゃった覚えあるから」

「それに確か、他の女の子達もだったような……」

名前を1つ1つ見つめて、確認していくルーク。

「どうゆうこと……？」

その言葉を聞いたレオナは首を傾げ、顔を顰めた。今の情報を纏めると、失踪するのは丘の近くにいた男の子か、男の子に似た女の子。それと噂によれば、茶髪という要点も混じってくる。

頭を押さえながら、レオナは地図を見つめた。

「……年齢はバラバラよね、ルーク」

「あ、はい。小さい子が5歳から、大きい子が…ファンだから…14、15くらいまでです」

差し出されたお茶を飲むとしていたルークは急に話を振られ、カップを両手に持ったまま考えるように天井を見上げる。どうやら、それが彼の癖らしい。

「まあ、ゆつくり考えて下さいな。……そういえば、ルークは本当に色々な人と知り合いねえ。ファン君、かしら？」

ルークはまだ冷めない紅茶に息を吹きかけながら、ルーシーの顔を見返し頷いた。頬をかきながら紅茶に口をつける。

「ファンは区も一緒だし……それに知り合いが多いのは父さんが町長だからじゃないかな」

「そういえば、お父さんは元気？」

2人の会話を聞いていたレオナはお茶菓子の1つを食べながら、もう一度地図に視線を落とした。名前と区、年齢と特徴…その全てを眺めながら首を傾げる。心の中で1つの疑問を自身に問いかける。

（まさか……）

一瞬、また絡みつくような視線を感じてレオナは窓の外に視線を向けた。外には無邪気にハシヤギまわる子供達の様子が見えた。向こうの木々の間から顔を覗かせる海岸、そして小波の音が耳を擦り、悪戯に背筋を逆撫でしてゆく。張るような緊張感に、レオナは隣に座っているルークに視線を戻した。

気付いている様子はない。いや、ついこの間初めて妖精を見たと言っている人間に、その視線を感じるとまでは言わないが……。

ふと、こちらを見つめて何かを考え込んでいるレオナに、ルークは首を傾げた。

「……？どうしたんですか？レオナさん」

その声に我に返ったレオナは、ルークの顔を見返して首を左右に振った。少し疲れたように笑い返して、椅子を立つ。

「……なんでもないわ。ところで、その丘の所に行ってみたいんだけど」

案内を請われ、ルークは微笑んで頷いた。ルーシーと傍らの少女に軽く頭を下げ、先に外へと向かったレオナの後を追う。その様子に気付いたのか、子供達の何人かが玄関の方へと集まって、手を振ってくれた。

レオナはまだ混乱する頭の中を無理矢理押しとどめて、子供達に笑い返した。外に出ると涼風が彼女の1つに纏めた髪を揺らす。まとわりつくのは潮の混じった風だけではなかったけれど、レオナとルークは子供達に手を振られ、孤児院を後にした。



## 第2章3 妖精の丘

「ルーク。聞きたいことがあるんだけど」

商業区と居住区の裏手に位置する小さな丘は、街の所有土地として自然公園のように扱われてきた。商業区から足を伸ばして丘へと進んでいたルークにレオナは改めてそう聞く。

ルークは隣に並んだレオナの表情を見上げて、頷いた。

「ルークは私の……いえ、セレスの家に来るまで、妖精を見たことはなかったのよね？」

「え？あ、はい。……どうかしたんですか？」

レオナの突然の言葉に、ルークは首を傾げた。

だが、レオナはその問いには答えず、向こうに見えてきた丘に向かって歩を進めた。ルークはその様子に疑問を覚えたが、とりあえず一番近い道から丘を目指すことにした。もうすぐ、日が山脈の向こうへと沈む。暗くなると何かと危ないかもしれない。ルークは空を赤く染める夕焼けを見上げた。

「あの時は小さく見えたけど、近づいてみると結構広くて大きいからね」

孤児院の散歩コースを奥に続く道へ曲がると、丘はすぐ側にあった。この道からは丁度丘の中腹に出る。ここからの眺めもなかなか良い。夕陽に赤く染まっていく空と、夕闇を誘う海の色。街はゆっくりと明かりを灯し、街の賑わいもゆっくりとおさまっていく。ルークの家も、中心の公園と時計台もここから一望出来るようだった。

「けど、子供達があんまり奥まで行かないように柵を作ったりしているんですよ」

そう言つとルークは向こうの林の奥を指差した。影を落とす鬱蒼とした林の手前に、木で造られた柵のようなものが見える。そして隣には注意を促す看板。

「！」

ふとレオナは何かに気付いたように今来た道を振り返った。ルークもその視線を追つて、後ろを振り向く。木々に両端を囲まれた山道が風に揺られて葉擦れの音を響かせた。

「ルーク。ちょっとこっちに」

「え？」

腕を引くレオナに、ルークはもう一度山道を見返した。すると、道の向こうから、何か小さな物体がこちらへ飛んでくるのが見える。一瞬鬼蜻蜓かと思ったルークだが、その物体の大きさに口を開けた。

「……あ」

レオナに腕を引かれるまま、ルークは木々の後ろに隠れた。幸いなことに、雑草と常緑樹に囲まれたこの辺りは子供達が隠れんぼをするには丁度よく、2人の姿も木々の枝が覆い隠してくれる。それに時間は黄昏時。身を隠すには絶好の時間帯だ。

「……レオナさん、あれは……？」

小声で尋ねるルークに、レオナは同じように身を隠しながら答えた。広い場所へと出たその物体は、背中の羽根を器用に動かし奥へ奥へと飛んでいく。その姿はトリクとは違い、茶色の柔らかな髪をカールさせた、女の子のような姿。

「ピクシーのようだけど……ああ、ピクシーというのは絵本とかによく出てくる妖精よ。似ているでしょう？」

確かにその妖精は女の子のような姿形に羽根を生やしていた。透明な羽根が夕焼けの空に透けて見える。薄緑の服に小さな帽子のようなものを乗せている姿は義妹達に読み聞かせた絵本の妖精と全く同じに思えた。頷くルークに、レオナはまた木々の間に顔を埋めた。ルークも視線だけを丘の入り口に向け、それに気付いて同じように身を隠す。

『はあ、どうしようどうしよう、早くしないと怒られちゃうよ……』  
『怒られちゃうよ、じゃないのー！折角、それらしい人見つけたのに、レクファがアンシーリイ・コート怖がって逃げちゃうから、見失っちゃったの！』

後から入ってきた妖精も、ピクシーと同じ外見をしていた。違う所といえば、その髪型と顔が男の子のように見えることだろう。レクファ、と呼ばれたその妖精は溜息をついたように頭を下げた。

『……だって』

逆に女の子の方は頬を膨らませて、不平不満を口にする。

『確かにリキュアは怖いの！でもご主人様の雷も怖いのっ！リーファ、怒られたくないのっ！』

知らない名前にルークが首を傾げる。妖精の名前だろうか？そう考えた途端に、何かを思い出したようにレオナが呟く。

「……レクファ、リーファ……？」

ふとレオナが顔を上げた。そのせいで体に当たっていた枝が音を立てる。葉擦れの音もしない、無風の空間。その中で不自然な葉擦れの音がはつきりと響いたはずだった。

「待つ……」

レオナが立ち上がった。けれどもうそこには2人の妖精の姿はなく、風もない丘にその声だけが響く。レオナは嘆息すると木々の間から出て、ルークを呼ぶ。

「……レオナさん、さっきの妖精と知り合いですか？」

レオナの手を借りて足下の枝を跨いだルークが、服についた葉を払い落しながら言う。丘の中心に視線を向けたまま、レオナは歩き出す。

「……名前だけね。顔は見たことないけれど……それよりルーク、あれ見える？」

丘の中心まで行ったレオナはさらに上を指差した。追いついてきたルークがその指先の延長線上に視線を向け、言葉もなく口を開けた。

闇色を交えた空を背景に、大きな扉がそびえ立っている。それはどんな鉱物でも作れない、純白を貴重とした壁、そして柱。3段ほ

どの階段の上には雨避けがあり、その向こうにももの凄く大きな扉が外界との空間の境を閉じようとしていた。

レオナの後ろから見上げたその扉はまるで巨人の為に造られたかのような、そんな大きさをしている。感嘆の声が出ないほど、ルークは驚きに包まれていた。柱の1つに手をやると、まるで宝石のように滑らかな感触をしている。まるで大理石のように思えた。

「これは……」

レオナの言葉を引き継ぐように、それは姿を現した。

『扉を知るか、魔女の弟子』

ふと、空気が動いた。歩み出るようにして扉の前に姿を現した空気の塊。それが時間を経て人の姿へと変わった。否、それは人のように見えたがルークもはつきりと直感した。

（……妖精だ）

多分、トリクの言っていた小妖精じゃない妖精。人間と同じくらいの身長をしている。老婆のように皺を寄せた顔をレオナより小さなローブで覆い、腰を曲げているせいか、その身長はルークの胸あたりまでしかない。

羽根は無いが、それは確かに妖精。どこことなく魔女にも似た雰囲気があるが、レオナは直感していた。

「名前だけよ……そして貴女は『扉の妖精』。妖精の国と人間の国を行き来する扉の鍵守人。そうすると、ここは妖精の集まると言われる『妖精の丘』？」

レオナは一瞬苦々しい顔をした。それは彼女の知識が、これ以上奥に踏み込めないことを警告していたからだ。それを見つめた老婆の妖精は、ローブのフードから口元だけをつり上げてみせた。

『魔女の弟子よ、汝の言葉が通り。……扉に隔てられし向こうは人の進むことの許されぬ、時空と空間の狭間、妖精の国。夢の理想郷へと入るには、言葉を紡げ』

警告が確信となる。レオナは舌を鳴らすと、ルークの腕を掴んで身を翻した。

「え？」

「合言葉を言え、という意味よ。仕方ないわ、ここは引き返しましょう」

腕を引くレオナ。ルークは困惑して老婆の妖精に視線を向けた。やはり覗き見る口元はつり上がり、周りの皺がさらに深く刻み込まれる。

『……天の目の如く、光揺れ 幾許清き風は吹く』

「……え？」

ルークはふと足を止めた。そのせいでレオナの手が腕から離れる。怪訝そうに振り返ったレオナが首を傾げてルークを見つめた。

『千の護りと証をもって 汝、扉の鍵とせん』

「……ルーク？」

レオナの声にルークは振り返って言った。

「レオナさん、唄！初めてレオナさんの家を尋ねた時に、花壇のところで聞いた、あの唄じゃないですか？」

ルークの表情に、レオナは顔を顰めた。そして何かに気付いたようにルークの肩をきつく掴む。ルークはそれに痛みを覚えたが、耳はしっかりと老婆の口にする囁れた歌声に聞き入っていた。

「ルーク、その唄が聞こえるの……！？」

「え？だって、あのお婆さんが歌って……」

指を差す代わりに視線を老婆のもとへ向ける。

『真の未知を望みし者は 証をもって答えたり』

「本当に、それが聞こえるの！？鍵守人の合い言葉は特定の者にしか聞こえないのよ！？あの時、私には妖精の気配しか分からなかった……！」

肩を揺らすレオナの焦ったような表情。滅多に見ないその顔に、ルークは混乱しながらも、首を縦に振った。瞬間、レオナは何かに気付いたように手を止める。肩を掴んだまま、視線を足下に下げた。

『鍵を唄うは眠りの精

子よ その言葉が鍵なれば

忘るることなく、汝の中に……』

歌声が終わると同時に、老婆は顔を上げルークを見つめた。そこから覗いた目は、新緑の木々に負けないくらい深い緑の瞳。そして笑い皺が更に深くなり、乾いた唇が合い言葉を口にする。

『運命に惑わされし者。夢へと還る言葉を紡げ』

この時、ルークは全く無意識に答えを口にした。それはあの魔女の庭で歌声を聞いた時思った言葉。否、今となれば確信に近い。それは夢への鍵、レオナにその視界を阻まれるまで夢現とあの花壇へ足を踏み入れた時と同じ。

残暑の空気は暖かった。不快な意味ではなく、包んでくれるような、そんな……。

誰にでもあつて、自分にはない、大切な思い出。

「『子守唄』……？」

瞬間、レオナはルークの腕を掴み損ねた。爆風にも似た衝撃が体を包み、扉は閃光を伴いながら自身を開け放した。突風のような強風が吸い込むように体を扉の奥へと引き寄せる。

レオナは一瞬間で腕を風に絡め取られることのないよう、動かしただ。空中になぞる光の文字。のし掛かるような圧力が身体を襲う。多分、それはルークも同じ。

『これが人間が妖精の国に行けない理由』

記憶の中でも余裕で語りかけてくる師匠の有り難くもない言葉。小さな舌打ちも、強風の音の中に消える。

(……今更、あいつの言葉を思い出すなんて思ってもみなかったわ)

こんなところで、とレオナは齒を食いしばった。呪文もまた、強風に掻き消される。それでも良い、魔法を使うのにいるのは気力。それを補うための言葉なのだから、言ったという自覚があればいい。

「天在り地在り光在り。闇は乗じて光と在り」

言葉は勿論自身の耳にも届かない。骨を振動させるほどの強風。それは痛みにも似た、風の刃。気付かないうちに腕が切れたのかもしれない。血の流れる感覚は無かったけれど。

「世界の狭間に力在り、幻という神の剣よ」

真っ白な光に染まった世界は、自分しかいなかった。自分しか存在しなかった。けれどそれは慣れている。あの師匠の元にいれば嫌でも。

『結局、魔法を使うときに信じられるのは1人。自分だけさ』

（結局アンタの思うツボね、セレス！）

怒りを込めて、最後の呪文を口にする。

「己の力よ盾となれ 異なる世界の時空を越えて！」

その時。

レオナは風が治まるのを感じた。けれどその視界が扉の向こうを映すことなく、無情にもその世界を目にする瞬間に力が抜け、そして意識が途絶えた。

闇の中に意識が溺れていくのを感じながら、レオナは奇しくもあ

の師匠の笑い声を聞いた気がした。

### 第3章1 妖精の国

露草が頬を打った。湿った地面の感覚にルークはやっと重い瞼を持ち上げる。体は意識に反して上手く動いてくれない。とりあえず、視界に入った右手に力を込め、動かしてみた。5本の指がゆっくりとだが、地を掴むように拳を作る。まだ完全とはいかないが、もう少しすれば体も動かせるようになるかもしれない。

ふと、耳元の雑草がざわめくような音を立てた。葉擦れの音だけではない。靴が草を踏み、木々をかき分ける音も混じっている。ルークは上手く働かない思考の中で、身体に動くよう命令を試してみたけれど、動かない。視線だけをその音の方向へと向けて、目を細めた。

「……なんだい、珍しいね。行き倒れかい」

足は見えた。女物の靴。声色からしてもその人物が女性であることに間違いなかった。ルークは何か答えようとしたが、出てきたのは息と小さな唸り声だけ。喋ろうとすると体の節々に痛みが走った。ルークは視線だけでもその人物の顔を見ようと、視線を上にした。すると、その女性は、ルークの目を覆って小声で言う。

「おっと、ちょっと待ちな。わたしや、スカートだからね。見上げられると困るから」

若い女の人の声だ。けれど、その言葉遣いは何処か古くさいような感じも漂わせる。するとルークは突如感覚が反転したのをかんじた。どうやら俯せになっていた体を仰向けにさせられたらしい。一瞬痛みに顔を顰めたけれど、段々とその痛みも和らいできたように

思えた。

「……おんや？あんた人間じゃないかい？ははん、あの扉の圧力のせいで脱力してんだね。大丈夫だよ、痛みはあるだろうけど折れてはいないさ」

するとルークは半開きになった唇に何かを流し込まれた。小さな瓶のようなものに入っているそれは、無味無臭の液体。水だろうか？

「別に怪しいもんじゃないよ、ほら」

少し強引に口を開かされ、口内に流し込まれる。一気に流れ込んだ水分にルークは噎せた。その女の人ルークを抱きかかえ、咳込んでいるその背中をさすってやる。

「……けほっ、けほっ……」

「これで喋れるようになったら？そんで？アンタ名前は？」

咳き込む度に痛みはあつたけれど、ルークは体を落ち着かせて視線をその女性に向けた。深海の色をした髪の毛。黒とも紺とも青ともとれる髪を1つの三つ編みに結んで、左肩からそれを垂らしている。悪戯そうな瞳と、白い肌。

歳はレオナより上か、同じくらいと言ったところだろう。

「……ルーク、……フロー……」

すると視界の中の女性は間をおいて豪快に笑った。

「そうかい。わたしや……カルナ。ここいらじゃそう呼ばれるね」

「……は？」

ゆっくりと身を起こそうとするとカルナは背中に手を回し、それを助けてくれた。まだ立てないので、とりあえず上半身だけ起こして辺りを見回す。

「……レオナさん、は……」

ルークは辺りを見回した。けれどそこにはカルナの姿しかない。答えを求めるように視線を向けると、カルナは首を横に振った。

「ここに行き倒れてたのはアンタだけだよ…とりあえず、立てるようになるまで、もう少しこうしてな」

ルークの体を巨木に背を預けるようにして座らせると、カルナは立ち上がって足下の草を払った。木々のざわめきが、心地よく耳を掠める。澄んだ風が、森の間を縫うように通り過ぎ、ゆっくりと消えていく。

「……それじゃあ、ここが妖精の国なんですか？」

まだ覚束無い足取りで崖の近くまで行くと、木々の間から果てしなく遠くまで街が続いていた。所々に山がそびえ立っていて、その向こうにまた街が見える。集落のような小さい家々の集まりも望むことができる。

ルークの想像に反して、そこは人間の住む土地と何ら変わりなかった。トリクの言っていた、「人間と変わらない生活」というのも、

今なら頷ける。

「そうさ。そしてここは国王様の城下、クレーサっていう街さ」

「凄く大きい街ですね」

そうだろ、と鼻を鳴らしてふんぞり返るカルナ。視線を眼下へと向けたルークは辺りを見回して見える限りの人々を観察する。道の1つ1つを見つめて、ルークは首を傾げた。

「……なんだか人間の国とあんまり変わりがない……？」

すると後ろからカルナが大きな声で笑い出した。突然の事に、ルークは驚いて後ろを振り向く。崖の横の坂から街へ降りようとしていたカルナが、腹を抱えて笑っていた。

「くくつ、ははははははっ！そりやそうさ！妖精は小妖精だけじゃあない。むしろこうゆう街とかは人間の大きさをした奴の方が多いんだよ」

「そ、そう……なんですか？」

「そうさ。それじゃあ、何も知らない人間様に、観光旅行でもさせてやるかね。ついて来な！」

手招きをするカルナに、ルークは満面の笑みを浮かべた。見知らぬ土地、そして妖精。一時、この世界を見て回るのも良いかもしれない。なにより、ルークの探求心の大きさは誰もが認める位なのだから。

（もしかしたらレオナさんも街にいるかもしれないし……）

舗装されていない獣道をカルナの後を追いつながら歩いていく。時

折滑り落ちそうになりながらも、ルークはカルナの手を借りて街へと降りた。

「クレーサってのは城下街さ。王様がいるのはもうちょっと離れた所なんだけどね。ちなみに国王の名はバルク・セラヴル」

しばらくして街の外側の街道に出た。先程上から見た城下の風景と違ってここは少し田舎のように見える。所々に小さな林があり、家や店がバラついている。カルナは持っていた袋を肩に背負うようにして歩き始めた。ルークもその後ろをついていく。

「つま、国王つつつてももう歳さ。新しい王を決めるために今色々ゴタついてる」

「王様って、長男が継ぐんじゃないんですか？」

道にそって歩いていくと、家々が密集しだした。端から見ると人間のつくるそれと何ら変わりはないが、よくよく覗いてみると見たことのない文字の看板が見える。どうやら、レオナの家で見かけた妖精の国の地図と同じ文字に見えた。崩し方も書き方もそっくりなのだ。

カルナはその紺色の三つ編みを揺らしながら、大股に足を進める。

「母親が一緒なら問題はないさ。けどね……4人とも母親が違う。1子は資産家で有名なセルディール嬢の子、2子は南の海岸周辺で権力を振るうアレース家の長女との子、3子はアンシーリイ・コートと繋がりがあると言われているサルト嬢の子、4子は何処の誰だか知らないクロートレンと名乗る女との子……まあ、2子と3子は完全に政略結婚」

カルナの持つ袋が歩く度に盛大に揺れた。ルークはその様子を見上

げながら、王室の複雑な人間関係に驚きの声を上げる。王都でもそうゆう噂はよく聞くけれど、実際自分の街にはあまり関係がないので、実感がわかない。

「凄いですね……偉い人って大変そう……」  
「いやいや、大変なのはここからさ」

ちゅちゅちゅ、と指を動かすカルナにルークは首を傾げる。人通りの多くなってきた道。やはり近くで見てみても、妖精と人との区別が分からない。時折目の前を通り過ぎる小妖精以外は、人間の国にいても見分けがつかないかもしれない。

「こうゆう時は国王様の任命になるんだ。けど、どうやら国王様のお気に入りには4人目のお后……つまり何処の誰とも知らない女なんだよ。ま、恋愛結婚だから当然って言えば、当然さね」  
「そっか……それじゃあ、周りが許してくれませんかよね」

カルナはルークの目を見つめ、ゆつくりと頷いた。

「けどその4人目のお后って言うのが、今行方不明なんだよ。第4子も一緒にね」

「え……？それじゃあ……」

向こうから来る妖精達にぶつかるのを避けながら、ルークは首を傾げる。カルナは視線を道の向こうにむけて、袋から出した地図らしきものを取り出した。

「4子を探せってんで城は大騒ぎ。出てこられちゃ困ると思ってる他の王子達も大慌てさ。……おっと、買い物があったんだ。ちょっといいかい？」

ふと足を止めたカルナにルークも立ち止まり、その店を見上げた。煉瓦らしいものを積み重ねて出来ている店の看板は、何と書いてあるのか分らない。けれど装飾された看板の横に何やら薬の瓶らしき絵が描かれている。薬屋だろうか。

「ちよつとここで待つてな」

そう言われたルークは頷いて、入り口の前で道行く妖精達を眺めていた。本当に人間と何ら変わりがない。まるで、人間の国にいるような感覚だ。街の賑わいも、行き来する者達も…。

小妖精の子供らしい、更に小さな妖精が飴玉のようなものを持つてはしゃいでいる。その奥には縄跳びをする人間の子供くらいの大きさをした妖精。聞いたことのない遊び唄を唄いながら駆け回る子供達。親に手を引かれて歩く妖精。その幾つもの笑顔。ルークはふとそこから目を逸らした。

見たくないわけじゃない。人間の国でもそんな微笑ましい風景を何度も見た。微笑ましいと心から思った。

(……どう、したんだろ……)

孤児院にいた頃も、こんな想いをしたことはなかった。同じ院の子供の中にはそうゆう光景を見るのが嫌で外に出なかった友人もいる。けれど、ルークはそんなこと思わなかった。けれどいつの間にか視界が滲んでいる。

(どうして僕、こんなに……)

悲しいんだろう。

風が頬を撫で、前髪を揺らして通り過ぎてゆく。耳元を擦る微風は心地よかったけれど、心には痛みしか与えなかった。木々のざわめきをこんなに不快に思った事はない。街の喧噪に耳を塞ぎたくなかったこともなかった。

『天の目の如く光揺れ  
幾許清き風は吹く  
千の護りと証を持って  
汝、扉の鍵とせん』

ふと一瞬幻のように聞こえた言葉が琴線に触れた。顔を上げたルークは歌声の元を探す。声はこの店の裏手から聞こえてきているようだった。

『氷雨の降りし国なれば  
亡者行き交う刻苦の地  
紅ひ薫る誘いの地  
その心その場に許すことなし』

店の門はどうやら庭へと続いているらしかった。ルークはゆっくりと庭の方へ足を進める。角を曲がると、どうやら日向ぼっこをしているらしい母と子の姿が見えた。子供は1歳か2歳といったところだろうか。着ている服装からして男の子だと分かる。

『真の未知を望みしものは  
証をもつて答えたり』

縁側で子供の頭を撫でる母の表情は、慈悲深い優しい表情をしていた。ルークはその風景に足を止める。

『鍵を唄うは眠りの精  
子よ、その言が鍵なれば  
忘るることなく、汝の中に……』

ふ、と子供の寝顔を見つめていた母親がこちらの視線に気付いた。  
驚くでもなく、ルークに問いかける。子供を起こさない程度の音量  
で。

「……あら、お客さま？」

急にそう尋ねられて、ルークは驚いて首を振った。そして考え直  
したように、こう答える。

「えっ……あ、待っているんです。知っている人が今お店にいるか  
ら……えっと、その……」

覗き見していたことを謝ろうとルークは口を開いたが、良い言い  
訳が思い浮かばず結局口を閉ざしてしまった。赤面しているのに気  
付いたのか、その母親はふっと微笑む。  
金髪の癖のある髪の毛が微風に揺れた。

「気にしなくてもいいわ」

そう言って小さな我が子の頭を撫でる。ルークは少しだけその母  
子に近づいて、先程の唄について聞いてみた。相手はことのほか優  
しく返答を返してくれる。

「あの……今のって、子守唄ですよ……」

「あら……そうよ。この国全体の共通の子守唄。……貴方、知らないの？」

不信な感情は微塵も感じない。ただ純粹な疑問のみで聞き返してきたのだろう。けれど、それに焦りを覚えたルークは、とりあえずカルナの名を出すことでそれを回避した。

「えっ、あ、か、カルナさんの知り合いで……遠くから来たんです……」

嘘をつくことは心苦しかったが、それでも相手は信じたようだった。何かを悟ったように、あの慈悲深い微笑みをくれる。風に揺れる庭の木々が優しく揺れ、やっとルークは先程の辛い感覚を忘れる事が出来た。

「あら……それは大変ね」  
「あっ、そ、それで……その、子守唄ってなんなんですか？僕、よく分からなくて……」

自分の正体の話題から話を逸らそうと、ルークは話変えた。それはあの扉をくぐった時からずっと悩んでいたことでもある。なぜ、あの時レオナに唄が聞こえなかったのか、そして自分が合い言葉を知っていたのか。

母親は金の癖毛を髪にかけスヤスヤと眠る子供の様子に微笑むと、ルークに視線を向けて言った。

「そうね……この国に住む人共通の合い言葉、かしら」  
「合い言葉、ですか……？」

暖かな日差しが空から降り注ぐ。それは人間の国の季節とは違い、吹く風も春の面影を残している。ルークはこの季節が大好きだ。誰

かに抱かれているような、そんな暖かさが自分を包んでくれるから。母のような、そんな感じがするから。

「そう。1番は共通だけど、2番からはその母親によって唄が違いのよ」

「へえ……そうなんですか」

母親は微笑んでルークを見つめた。

「2番の歌詞にはね、その母親の想いがこもってるの」

その柔らかい笑顔。ルークはふと自分を捨てた母のことを思った。記憶は欠片も存在しない。

まだ赤ん坊だったルークは山の中、灰に包まれて捨てられていたのだという。辛うじて顔を外に出し、泣き声を上げていたルークを見つけてくれたのが今の義父と義母。一旦ルークは孤児院へ連れていかれたが、7歳になっても引き取り手がつかなかったため、義父と義母が自分を引き取ってくれたのだ。ルークという名前は拾われた時着ていた服に書かれていたらしいのだが。

ふと庭に誰かの足音が入り込んできた。

「おや……こんな所にいたのかい」

「あら、カルナさん」

1人で考え込んでいたルークの背中を、カルナの手が叩いた。それでやっと我に返ったルークはとりあえず母親に会釈して、荷物を手一杯抱えているカルナの手助けをする。その様子を微笑んで見つめていた母親が、後ろから声をかけた。

「それじゃあ、カルナさん。ええと……」

「あ、ルーク・フローといます」

その名前を聞いた母親はおや、と首を傾げた。あまりこの国には無い名前なのかもしれない、とルークは思う。

「……それじゃあ、ルーク。また来てね。今度はこの子が起きている頃にでも」

「はい！」

男の子が起きない程度の声でそう答えると、ルークはカルナの背中を追って歩き出した。春風が今は心地よく首筋を撫でて、消えていった。

行くあてもないだろう、とカルナが案内してくれた家は、豪快なカルナの性格に反して割と小さい家だった。扉を開けるとルークは一瞬固まってしまう。その様子を見て、カルナは笑った。

「汚い家だと思っただろ？ま、入りな！」

「えっ、あ、ああああの、そんなことは……」

生来の正直者は嘘が下手だった。ん？と覗き込むようにその悪戯な表情をむけられて、降参したように小さく頷く。まず最初に目に入ったのは、散乱した下駄箱。どうやらカルナは派手好きらしく、色とりどりの靴がそこかしこに散乱しているのだ。中には玄関口に飛び出したスリッパも見える。とりあえず踏みつけないように、と

注意しながら中に通されたルークはカルナの後ろについて、家の隅々を見渡していく。心なしか床の隅が白く染まっている気がした。

「リビングは真っ直ぐ行ったところにある。ま、それ以外の扉は開けない方が無難だね」

それは開ける開けないの比ではなかった。開け放しにされた扉からは本やら得体の知れない液体の入った瓶やら、食料の食べかすが散乱している。臭いがしなかったのが唯一の幸이었다。閉まっている扉も何やら奥に詰め込まれているらしく、扉が時折ギシギシと軋んでいる。比較的新しい部屋なので蜘蛛の巣は張っていないかったのだが、それは何処かの風景を彷彿とさせた。

「……えっと、カルナさんって……何をしている人なんですか……？」

尋常ではない部屋の散らかりように固まりながらもルークはやつとそれを口にすることができた。すると奥から埃を被ったティーカップを掘り出してきたカルナが振り返って、また豪快に笑ってみせた。女性であるにもかかわらず、その豪快さは男にも勝る。

「はっはっは、何をしているか気になるかい？」

「はい」

素直にそう頷くルークにカルナはティーカップを洗いながら言った。勿論流し台も、目をあてられない程の有様。

「そうさね……発明家のようなもんだね。常に新しい情報を追いかけて、新しいモノを創る……けどそれだけじゃ金は入らないから、バイト中さ」

発明家…そう聞くとあの部屋の有様も頷けた。研究中だったのかな、と思ったルークはとりあえず勧められた椅子に座る。辛うじてそこだけは綺麗にしてあるテーブルの上に、カルナが紅茶を持ってきた時だった。

「ま、物質的なもんじゃなくて、ま……………」  
「っ!？」

衝撃音。そしてそれに連動して家が震えた。ルークはふと天井を見上げ、パラパラと落ちてくる土壁の砂を見つめながら、首を傾げた。

「…………地震、ですか？」

突然の振動に、入れたばかりの熱い紅茶をあろうと足にかけてしまったカルナは床を跳ねながら叫んだ。

「まさか。この国に活断層なんてもんはないよ。…………あっちー」  
「それじゃあ、何か…………」

ふ、とルークは背筋を舐めるような感覚を覚えて窓の外に視線を向けた。日の暮れた風景の中、闇が一瞬だけ蠢く。ルークはその光景に目を見張った。あり得るはずなどない。この窓は道に面している場所にある。木々の生えている裏山なら風にざわめく枝の仕業かと思えるが、道の中心にそんなものありはしないのだ。

「ルーク、下がりな!」

瞬間、その窓の硝子が消えた。遅れてルークの耳に窓硝子の破片

とその割れる音が木霊する。丁度カルナに後ろへと下げられたルークは破片を被ることはなかった。

「……黒犬獣を持ってくるたあ、やってくれるね……アンシーリイ・コート共」

「！？カルナさん、アンシーリイ・コートって……」

視線だけを窓に向けたカルナは長い三つ編みをポケットから出したバレッタで留め、振り返らずに後ろにいるルークへ言った。

「まあ何、いつものことさ。さすがに……」

続く衝撃音。何処からか聞こえてくる恐怖の悲鳴。足下が覚束無い程揺れる床にルークは倒れそうになりながらも壁に手をつく。

「……貸家を壊されそうになったのは初めてだけだね」

「カルナさん、逃げなくていいんですか！？」

なにやらこの状況でも余裕の表情を崩さないカルナに、ルークはそう声をあげた。アンシーリイ・コートという妖精がどれ位怖いものなのか、レオナ達に聞いたときは分からなかった。けれど、今なに分かる。全身に鳥肌が立っているのが嫌という程感じられる。

カルナはズカズカと窓に歩み寄ると、後ろ手に廊下を指差した。

「ルーク。廊下に出てすぐの所に、開いていた部屋があったろう？あそこにアタシ特製裏口があるからね、そこから出て真っ直ぐ山に登りな」

「……え……？でも、カルナさんは……！」

壁に身をまかせながら、ルークは叫んだ。けれどカルナは視線を

窓に向けたまま、振り向かない。何かと睨み合っているのかもしれない、と混乱した頭が答えを出した。

「……いいから行きな。わたしや、こんな所でくたばったりはしないさ」

カルナはそう言うと、左手をスカートのポケットに突っ込み、何かを取り出した。それは黒い石のついた、ミサンガにも似たアクセサリ。それを後ろへと放り投げ、言った。ついさっき、初めて会った時と変わらないあの悪戯な声で。

「お守りさ。今度会った時にそれは必ず返してもらおうよ」

そして一瞬だけ、こちらを振り向いた。緊急事態などものともしない、余裕綽々の表情で人差し指を口元に持つてくる。

「……家に勝手に裏口作ったってことは、秘密だよ」

「……はい」

ルークは弧を描いて自分の手元に収まったミサンガを握りしめ、小さく頷いた。リビングを出て、先程カルナの言っていた部屋へと向かう。その瞬間、窓から黒い影が飛び込んできた。死の予兆とも言われる妖犬は、その漆黒の闇のような黒い毛と真紅に燃える目をカルナに向けた。腰ほどもある黒犬獣。だが、カルナの瞳は対照的に笑ったまま。

「面白くなってきたね。追う黒犬獣に、逃げる少年。向かう先は暗君の城か、君子の城か……。ま、とりあえずは」

カルナは口元をつり上げた。それは聖人の微笑みではなく、玩具

をみつけた時の、子供の悪戯な笑み。

「……ゲーム、スタート」

### 第3章2 たどり着く先

「……まさかアンシーリイ・コートに捕まるなんて、私も運がないわね？リキユア」

鉄格子の中から、レオナは目の前に立つ人物を皮肉った。何処までも無表情の赤髪の女。腸が煮えくりかえる程、意識は苛立っている。だが、それを押しとどめて冷静に事を口にした。

「あなたの気配に気付いた時点で手を打つべきだったわ……」  
「手などあるか、こちらの標的にも気付かなかったお前に」

剣の鞘を抜く音。鉄格子の間をすり抜けて、それはレオナの顔の前でピタリと止まる。するとレオナは自嘲めいたように微笑った。

「そうね……気付かなかった私も馬鹿だったわ。あなた達の……いえ、この国中の者達が探している相手。それが行方不明になった第4子だとはね」

「……気付くのが遅かったな、レオナ・デイル」

どこまでも男口調の女。主も主なら、仕える部下も部下だとレオナは思った。けれど、それを口には出さず、代わりにこう言った。

「……悪いけど、私はもう買い手がついているのよね。あの馬鹿師匠から魔法を教わって一人前になったら、という約束で」

「……人間の国とは時が経つのが早いものだ……数年前までとるに足らない子供だったお前が 今では一人前などとはざいている」

女は一瞬だけその無表情に表面上だけの笑みを浮かべた。嘲るような顔に決してレオナは良い感情など持つことはなかった。けれど、ここで叫び喚いても仕方がない。後ろ手を結ばれた状態では魔法を使うことも何も出来ないのだから。

レオナは怒りを息と共に吐きだした。

「アンシーリイ・コート、リキュア・エルス。あなたは王位継承権を失った第3子の部下を使って人間の国で第4子を探した。もうこの国には探し尽くしたから……そうね？」

見上げた相手の赤い瞳は、一度見たことがある。昔、レオナは一度だけこの世界……妖精の国に連れて来られたことがあった。あの師匠セレスと共に。その時、この女は今と同じように主の元に仕えていた。

（それは第2子、国民達には暗君になるであろうと謳われるデューン・アレース王子……）

相手は何も言わず、か細い蠟燭の明かりだけの牢屋でこちらを見下げていた。レオナは構わず言葉を続ける。

「……理由はそれだけじゃないわ。第4子の母、国王に最も愛されたクロートレンと名乗る女性は人間だという噂もあった。それであなただけは人間の国に入り、第4子に似た人間を探した。……そして見つけたのよ」

もつと早く理解するべきだった、とレオナは心の中で毒づいた。彼等の探していた4番目の王子が、自分の身近にいたことを。

「……全ての発端は捨て子だったルークの街で起こった。ルークの

身辺の人々やルークと同じ茶髪の少年、少女。そして、妖精しか知らないあの扉の鍵を、ルークは知っていた。……やっと気付いたわ、あなたが探していたのは……」

レオナは相手を見上げた。リキュアの表情は、先程の無表情に戻っていた。

視界を覆うような木々とその影。月明かりも薄暗く、足下ははっきりと識別することは出来ない。まるで黒い海の底のような森を中途半端な上空の光だけを頼りにして駆けてゆく。真っ直ぐ、という言葉が一瞬ルークの頭を過ぎった。人間の感覚は正確に直進出来るわけではない。磁石も地図も無しにただ自身の感覚だけを信じてルークは走った。

途中何度も足を止め、後ろを振り返りそうになった。切れる息で今来た道を見つめる。カルナの心配で胸はいっぱいだった。けれど、右手に握りしめたミサंगाがそれを許してはくれない。

ふと手元を見つめていたルークは、何かの駆けてくるようなそんな音を耳にした。まるで、犬がこちらに走ってくるような。ルークは走るスピードを早めた。まだ、相手の姿は見えない。とにかくルークにはカルナに言われた通り真っ直ぐに思った道を突き進むしかない。

木々の向こうに月が見えた。足下から地面が傾斜し始めたことを直感する。ルークは一瞬息を呑んだ。相手は完全に人間ではない。見たこともないアンシーリイ・コート。

人間には下りにくい傾斜でも簡単に下れるとしたら。

（けど、考えている暇は……）

ルークはとりあえず滑り落ちないように足を踏み出した。走るペースは遅くなるけれど、ここで木々の根に足を取られては転んでしまえば、もう逃げられない。前方の木に手をつき、出せるだけのスピードを出して走る。どこまで続くのか分からない山の中をルークは走り抜けた。

（レオナさんもないし、カルナさんもない……トリクも、皆……）

ふと昼間に覚えたあの感覚がまた胸の中に襲ってきた気がした。1人ぼっちという不安、そして心苦しさ。こんな時に、とルークは胸を押さえ前を見上げる。

ずつと奥に開けた場所が見えた。木々の枝がそこで途切れている。何かの建物がルークの目に映った。後ろから何かの駆けてくる音が近づいてくる。後ろを振り向いたルークは、森がまるでルークをここに留めるように黒い影を蠢かせている。否、月光が森の中に差し込んできた瞬間、それははっきりと見てとれた。

（……黒い犬の大群……あれが黒犬獣！？）

それはもはや犬という大きさではなかった。子牛程の体に、目は暗闇の中でも赤く、血のような瞳を輝かせている。瞬間、恐怖にかられたルークの足が滑った地面を蹴った。しかしその足はあろう事か斜面であつたためにバランスを崩す。

ルークの思考が何を思うより早く、体が斜面を転がり落ちて行つた。節々を木々の根や岩にぶつける。反射的に目をつぶり、頭を押さえたのが得策だった。体が地面へ叩きつけられる。開けた場所へ放り出されたルークは、背中を打って激しく咳き込んだ。

「っ……」

ルークは今日2回目の体の痛みに、声にならない声をあげた。涙は出なかったが、それより痛みと恐怖に体が震える。逃げなければ、と視線を今来た山道へと向ける。

『うつきやー!!黒犬獣がいつばいなー!!』

『ちょ、ちよつとリーファ、驚いてる暇あつたら手伝って……』

緊張した雰囲気の中、ルークは聞き覚えのある声を耳にした。体を起こすと、ルークの目の前に2人の小妖精の姿が見えた。透明な羽根を懸命に動かす、まるで男の子と女の子の容姿をしたピクシー。2人は森に向けて両手を向けると、黒犬獣がこちらに出てくる寸前に声を合わせてこう言った。

『『いつせーのっ』』

途端、森の出口に人間1人分くらいの大きさの土の壁が出現した。地面からそびえ立つように突き出てきた壁。そして反対側から大きな爆発音が木霊した。ルークが驚きの声をあげるより先にリーファの怖がっているのか、喜んでいるのか分からない悲鳴が響く。

『きゃー、黒犬獣が爆発してるー!!』

『リーファ……この壁時間稼ぎにしかないから……とりあえず、早く行こう?』

宥めるもう1人の小妖精、レクファがそう言いながら振り向いた。ルークを見つめて、小さな布きれを渡してくれる。どうやら顔についた泥を落とすようにということらしい。けれど、それは小妖精用

ミニサイズ。

「えっ、あ、ありがとう……」

とりあえずそれを受け取るルーク。するとリーファがルークの首筋に顔を擦りつけてきた。抱きついている様子を見てレクファは密かに溜息をついた。

『やったのー、これで王子にも怒られなくて済むのー!!』  
「……王子……?」

困り果てた視線を向けるルークに、レクファは一瞬だけ先程の土壁を見やり、そして言った。爆音は立て続けに向こう側から聞こえてくる。

『とりあえず、この人を王子の所に連れていこう?リーファ』  
『うん!』

前を飛ぶレクファを追ってルークは走り出した。肩に乗って首筋につかまっているリーファが少しくすぐったかったけれど、とりあえず危機を脱したことに少しだけ安堵の息をもらす。

三日月が空から彼等の様子を照らし出す。街の向こう、真実の待つ大きな城へと導くように。

それはまるで王都のような、大きな城だった。

2人の小妖精に案内されたルークは細い道を通り、城門の裏口からその城の敷地に入った。暗いのでその全貌を見定めることは出来なかったが、それは確かに王都の城より大きかった。裏口には4人の警備兵らしき人物の姿があったけれど、小妖精は気にも止めずにその前を通り過ぎてゆく。自分より遙かに大きな警備兵達を目の前に

して、とりあえずルークは頭を下げて走り抜けた。

どうやら時刻は真夜中らしい。見上げた空の三日月もとうに頂点を過ぎ、その姿もゆっくりと傾きかかっていた。星空はまるで見たことのないような配列をしていて、ルークの知る星など1つもない。改めてここが別世界なのだと思い知る。

『けど本当によかったの。黒犬獣に捕まっていたら、連れて行かれるところだったのー……』

肩に乗ってそう呟くリーファ。時折目を擦っているところを見ると、どうやら眠くなってきたらしい。城の敷地内に入って気が抜けたのかもしれない。城の内部にはまだ薄明かりが灯っていた。入り口の真正面に大きな階段がある。いくつもの蠟燭の光が揺れて、足下がはつきりとしていない。けれど手すりに掴まって登れば、まだなんとかなった。

『王子さま、怒るとすっごく怖いので……。だからルークさま捕まんなかったら……』

頭をカク、カクとさせながらそう言う小妖精。その様子にルークが苦笑した時だった。ふとレクファの羽根が止まる。

「ああ、確かに怒るな。それ以前に……」

目を擦っていたリーファの肩を振り返ったレクファが掴んだ。焦った様子でその肩を揺らすと、リーファもやっと目が覚めた。様子だった。レクファの肩越しにその人物の姿を見つけて、絶叫を上げる。否、その口から声が出ることはなかった。

声をあげると気付いたレクファがリーファの口を押さえたためだ。

「夜中に騒ぐのはよせ、リーファ。それでもなくとも」

入り口の上に位置しているステンドグラスから月光が差し込んだ。足下しか見えなかった相手の表情がはつきりと映し出される。ルークは一瞬息を呑んだ。その威厳の大きさだけじゃなく、その整った輪郭と造られたもののような姿に。

妖精だ、とルークはその事実を自然に受け止めることが出来た。人間と同じ身長と、人間と同じ顔。けれど、それに纏った雰囲気は確かに人間のものではなかった。金髪から覗いた瞳も創造物のように思える。

「大事な客人の前なのだからな」

小妖精達に向いていた視線がふとこちらに向けられて、ルークは一瞬戸惑った。だが、その瞳はこちらを見定めるように細められ、じつとこちらを睨みつけられる。剣呑な、眼差し。

「あつ、あの……」

「名乗らなくとも知っている。こちらへ来い、ルーク」

長衣の裾をはためかせてその妖精は踵を返した。2階の中央部にあった大きな扉を開け、中へと導く。小妖精達は顔を見合わせて首を傾げると、とりあえずその後を追った。

「簡単には出してくれないんでしょうね……」

レオナは足下から天井まで続く鉄格子の一本を握りしめて溜息をついた。牢屋には見張りが誰もいない。とりあえずレオナは辺りを見回し、壁際の窓から外を見つめた。冷たい空気。視線を下げてても地上が見えない。それはついさつき月が雲に遮られたせいもあるけれど、それ以上にこの城の敷地はゾツとするくらい暗かった。

視線を牢屋の床に向けると、そこには白い粉か何かで書かれた魔法陣のようなものがあつた。足でその一カ所を消してみる。しかしすぐその魔法陣は復活した。どうやら、城の上級魔術師が魔法封じの魔法陣を書いたらしい。レオナは顔を顰めて地面を蹴った。

（城の魔術師は結構な位を持っている奴が多い……しかもこの魔法陣、1人のものじゃないわね。数人の魔法が混雑してある……私の方が不利だわ）

光が浮かび上がるように蹴った部分がまた復活する。レオナは溜息をついて壁にもたれた。そのままズルズルと床に腰を下ろす。

（このままじゃ駄目ね。ルークの身が危ないし、それに……）

苛ついたように前髪をかきあげてレオナは溜息をついた。対処法を頭の中に巡らせていく。だがその為に、その小さな声に気付くまでにはかなりの時間がかかった。

「……ん、……姉ちゃん……、お姉ちゃん！」  
「？」

ふ、と顔を上げると、反対側の牢屋の鉄格子から顔を出している誰かの顔があつた。暗闇に浮かび上がったそれに一瞬レオナは息を呑んだが、暫くしてそれが子供の顔であることに気付いて、安堵の

溜息をつく。

見回りの妖精はまだ来ない。レオナは鉄格子に近づき、相手の顔を見た。

「お姉ちゃん、誰？」

暗いので相手の様子ははっきりと見て取れない。しかしそれが子供であることは確信できた。もしかしたら人間の国から連れてこられた子供かもしれない。レオナは相手の硬い表情を和らげるため、深呼吸をして落ち着いた口調で話始めた。

「……レオナ・デイル」

さて、ここから何の話をするれば良いのか。とりあえず、この子供がこの牢屋に入れられるまでの経緯と彼の名前を聞き出そうとレオナが口を開けた瞬間だった。その子供の顔が一気に驚きと笑顔の入り交じった表情に変わる。

「それじゃあ、お姉ちゃんが魔法使い！？」

「待って、大きな声を出すと見まわり、が………！？」

何故、という表情が思わず出てしまった。つい両手で鉄格子を掴んで、その子供に詰め寄ってしまった。この際、声が大きくなってしまおうが関係ない。レオナは喜びの表情を浮かべている男の子に対して叫ぶように言った。

「どつゆうこと！？」

レオナの反応に対して、男の子は寒いのか毛布にくるまったまま笑ってみせる。

「別なお姉ちゃんが言ってたんだ。えらーーーーい魔女様の弟子が来るはずだから、それまでの辛抱だって。時々様子を見に来てくれるんだ、そのお姉ちゃん」

レオナは一瞬固まった。大声に駆けつけてきた見回りの妖精に怒鳴られたからではない。むしろ何と怒鳴られたのかさえ、よく聞こえていないほどレオナの思考は停止していた。ある人物の誇ったような笑い顔を思い浮かべたまま。

「ねえ、お姉ちゃんも人間だよね？僕もそうなんだけど……って、お姉ちゃん、聞いてる？」

向こうの牢屋から返事はなかった。ただ怒りに震えるレオナの後ろ姿だけが少年の瞳に映る。この後、レオナの怒声が牢屋だけではなく城全体に響いたことは、現在この敷地内にいる者しか知らない。

### 第3章3 戻りし者は

「あ、あの……」

先程までの小妖精達の言葉で、その人物のことは分かった。何番目かは分からないけれど、多分王子の1人。当然そんな偉い人と会話などしたこともないルークは混乱する頭の中で話題の種を探していた。

しかし先程までの剣呑な眼差しに対して、椅子に腰掛けた後の彼の表情は無表情に近かった。笑いもしなければ、怒りもしない、そんな顔。黙っていると本当に造られた人形のようにだった。

「……私はクラウス・セルディール」

最初に王子が口にした言葉はそれだった。ルークの思考は昼間のカルナとの会話から、セルディールという名が第1子のものだと即座に判定を下した。資産家のお后との子供だとカルナが言っていた気がする。

「……ルーク。私はお前を捜していた」

「……え……？僕を、ですか？」

意味の分からない言葉にルークの緊張と混乱は治まることを知らない。無表情にそう言うクラウスは息を吐き、相手の瞳を見つめた。話の邪魔にならないように後ろで静かにしている小妖精達がふとこちらに視線を寄せる。

「私だけではない。我が義弟にあたるデューン、ブラーフ、そして

国王もまたお前を捜していた。ここ3年間、ずっとだ」

「え？あ、あの……」

クラウドは月明かりと蝋燭の光だけで照らされた部屋に視線を彷徨わせた。揺れる炎に床は照らされ、陽炎のような影が揺れている。真夜中の城は思った以上に静かで、まるでこの城以外に何も存在しないかのようだった。

「3年前、国王と4人目の后との間に第4子が誕生した。国王はとても喜んでおられた。最も愛する后だったからな……しかし、その4子はその后と共に姿を消した」

「……今も行方不明なんですよね」

口を挟んでよいものか憚られたが、ルークはぼつりとそれだけを口にした。するとクラウドは椅子から立ち上がり、窓から暗闇に変わった城下の風景を見つめる。彼にとってはなんの変わりもない、通常の夜の風景なのかもしれない。

「原因は他の后の妬みだ。何度も2人は身の危険にさらされた。……もともと、4番目の后は妖精ではなかったからな」  
「え……？」

ルークの疑問に返答は返ってこない。

「4番目の后は、人間だった」

振り返ったクラウドの金髪が月光を浴びて、金の糸のように輝いた。自分より幾つか年上らしいその瞳は、無表情でありながらも威厳が漂っている。妖精は美しいと詩人が詩にするのは大袈裟ではなく本当のことなのだ、とルークは心の何処かで思った。ただ、その

美しさは簡単に口には出来ない。口にははいけない気さえする。

「人間の国と妖精の国に流れる時間の違いというのは知っているか？ ルーク」

ふと話題を振られ、ルークは一瞬心臓が止まる思いをした。これほどまでに緊張しているのは初めてだった。相手は王子。まるで心臓の鼓動が体全体に響いている感覚さえ覚える。

「え、あ、……分かりません……」

微笑むでもなく、クラウドは返答した。まるでそう答えるように造られた人形のように。

「人間の国は妖精の国と違い、時間の流れが速い。人間はこちらの国に入った瞬間、遅くなった時間の重圧に耐えられず、死ぬのが普通だ。……魔法の防壁を使わない限り、な」

ふとルークはあの扉を開けた時のとてつもない圧力と意識の途切れる間に聞いたレオナの呪文を思い出す。あれは魔法で自分を守る為のものだったのだ、とこの時やっと理解することが出来た。

（レオナさん……）

大丈夫なのだろうか。あの黒犬獣に捕まってなどいないだろうか。ルークの胸にそんな不安が過ぎった。しかし、クラウドの声は続く。

「しかし后がどうやってこの国に足を踏み入れたかは誰にも分からない。だが、1つだけ言っておこう」

夜の帳が降りて、暗闇に染まった街。多分いくつもの子守唄が、口にされた後の静寂。吐息をたてて眠る国。全ては星空の輝く天空の下。

「人間は帰る時にも同じ重圧をかけられる。后が4子連れて人間の国に逃げたのだとすれば、確実に死んでいる」  
「それじゃあ、4子は……」

クラウドはルークの視線を呆れたように弾き返した。徐々に感情のこもりつつある瞳。けれどその瞳がルークにはどうしても怖かった。

「4子は妖精の血を引いている。死にはしない」

「……あの、僕……、意味が分かりません……。僕が皆さんに探されていたことも、全部……」

クラウドは高い視点からルークを見下ろした。それはレオナやカルナの向ける好意的な視線ではない。はつきりとルークはそれを自覚した。睨みつけられるようで、凄く怖い。

静かな空気。風の音もしない、無風の真夜中。真っ暗な闇。誰もいないような感覚さえしてくる。また、心苦しくなってくる。まるで発作のように。ルークは冷たくなつた右手を握りしめた。

クラウドの言葉が捲し立てるように強まる。

「……人間の国では15年の月日が立つた。捨て子として扱われた4子は孤児院という施設に入ったが引き取り手がなく、7歳で捨て子の自分を見つけた夫妻の家に引き取られた」

「……え……？」

「人間として生活をしていた……この国に来るまでは」

「……あの」

造られたような表情。それがゆっくりと感情を得たように変わっていく。突きつけられた真実に狼狽えることしか出来ず、ルークはただ言葉にならない言葉をしどろもどろに口にするしかなかった。その度にクラウスのきつい視線がこちらを刺すように見つめてくる。心は、締め付けられるように痛みを訴える。

（違う、そんなわけ……ないよ）

「魔女の弟子……レオナ・デイルの助けを借り、この世界に足を踏み入れるまでは……」

「そん、な……」

苦しい。ただ、心がそんな感覚を覚える。頭が痛い。そして怖い。クラウスの視線を浴びれば浴びるほどに心が悲鳴を上げる程痛みを覚える。胸が苦しくて、まるで何かが詰まったような……。

テーブルを叩く音がした。クラウスが怒りを覚えたかのように……否、怒りを抑えられなくなって、拳でそれを叩いたのだ。けれどそれにルークは反応出来なかった。反応出来ない程、ルークの恐怖は高まっていた。

「私達がどれだけ王の座を願ってきたのか、お前に分かるのか！？ルーク……いや、ルーク・クロートレン」

その表情はもはや無表情ではない。怒りという感情に突き動かされた、人形ではない者の顔。否、もしかしたら先程までの無表情はこの感情を抑えつけていたせいかもしれない。

「この国を動かす者になるため……抜かし抜かされ、争ってきた……。私がどれだけこの国を想ってきたか、お前に分かるのか！？」

行き場のない拳がまたテーブルを打つ。どうすることも出来ずに狼狽える小妖精達が、心配そうな表情で2人の様子を見守っていた。けれど、手を出すことは出来ない。これは小妖精等が踏み込んではいけない領域なのだ。

(……苦しいよ……)

ルークの瞳に涙は浮かばなかった。ただ視界が滲んでゆくだけで、それは頬を伝ったりなどはしない。どうしてだろう、どうしてこんなに苦しいのだろう。そんな疑問が何度も浮かび上がっては虚空に消えた。

『天の目の如く、光揺れ』

ふと、心苦しきで何も見えなくなっていたルークの耳元にそんな声が聞こえた気がした。いや、ルークの記憶がその優しい歌声に縋り付こうとしたのかもしれない。暖かい微笑みとその愛情に。

「しかし……これは国王の、我々の父の意志なのだ！4人目の後の子として生まれてきた、ただそれだけで……」

クラウドは言葉を続けなかった。握りしめた拳が痛みを覚えているのを知る。クラウド自身も自分が怒鳴ったからといって状況が変わらないことを知っていた。けれど、この怒りを何処へ向けろというのか。下を向いたまま動かないルーク。その表情もクラウドには

判断できない。クラウドは自分を落ち着かせるために息を吐いた。

『幾許清き 風は吹く』

あの魔女の庭で聞いた歌声。それについていこうとしたのは、心の何処かでその優しさに触れたかったから。無意識などではない。扉の前で、あの老婆の妖精の歌声に聞き入ってしまったのもそのためだ。

ルークは息苦しさの中でそれを理解した。そう、ずっと…平気だと思っていた。けれどそれはただの強がりではなく、こんなに苦しんでいる自分がきつと、何処かにいた。

『千の護りと証をもって』

「……国王がお前との面会を望んでいる。今日は城の部屋を1つ貸そう。レクファ、リーファ、案内してやれ」

『『は、はいいっ』』

それなら、何故自分はこの唄を子守唄だと思ったのか。ルークは2人の小妖精に肩を叩かれても、顔を上げようとしなかった。

『汝 扉の鍵とせん』

僕がこれの子守唄だと思えたのは、子守唄として唄ってくれた誰かがいたから……？

部屋を出ようと踵を返したクラウド。ルークは顔を上げた。立ち上がって、今にもこぼれそうになっていた涙を拭う。

（……大丈夫、きっと大丈夫。その真実があるなら……）

「あの……っ！」

ルークは叫んだ。顔を上げて、夜の帳は降りたまま。変わるこのない静寂と一人きりを思わせる暗闇。揺れる蝋燭に、床の陽炎。何も変わらない、突きつけられた事実と、過去。

その造られたように端麗な顔をルークはやっと見返すことが出来た。大丈夫、もう大丈夫、と心に言い聞かせる。否、そう言い聞かせているのは心かもしれない。相手の目を見つめ返し、そして聞いた。

「レオナさんが何処にいるか分かりますか？」

突如として投げかけられた意外な質問に、クラウドは一瞬戸惑った。目はまだ潤んでいたが、その視線は何かを悟ったようにしっか

りとこちらを見つめている。先程までの狼狽えた様子も見られない。

「……デューン・アレースに捕らえられていると報告があったが……」

「それじゃあ僕、レオナさんを助けに行きます！」

『ええっ！？』

隣を浮遊していたピクシー達が揃ってすっとんきょうな声を上げた。クラウドもこの答えに戸惑ったのか、頭を押さえる。けれど、ルークの強い瞳は変わらない。人をここまで困らせたのは初めてだと自分の中の何かが密かに呟いている。

「ルーク……どうゆうことだ？」

「僕は王様になんかなれません！ずっと僕は、本当の父さんと母さんがいないことに寂しがって、親子の姿を見つめては泣きそうになっていました。そんな自分のことしか考えられない人に、王様なんて務まりません。それに……」

どうしてこんなに強い瞳が出来るのだ、とクラウドは思った。理解できない。王になる権利を投げ出して、危険の中に身を投じようとしているのだ、この人間は。そう思えば思うほど、この異母兄弟であるルークの考えが分からない。

2子や3子の考えなら、簡単に理解出来た。クラウドを抜かし、国王に自分が優れていることを見せつけようという魂胆が見て取れたのだから。けれど、この4子である義弟はどうだ。

「僕は今やらなきゃならないことがあるんです。レオナさんを助けなくちゃ……」

「……それがどんなに危険なことだとしてもか？あの男はお前を殺す可能性があるぞ」

冷静を装ってクラウドスは聞き返した。けれど自分に向ける強い瞳は、その力強さを失わない。勢いだけではない、この弟は……。

「それでも……レオナさんが僕のせいで捕まっているというなら、放っておけません」

思った通りの返答に、クラウドスはやっと口の端を上げた。笑い声が込みあげてくる。笑ったことなど何年ぶりだろう。権力争いの為、笑うなどという感情を忘れていた気がする。クラウドスは義弟の瞳を見つめた。

「……面白い。それならデューンの城までの地図をやろう。あの魔術師を助けてこい。あれはもともと一人前になったら私が買い取る予定だった。城使いの魔術師としてな。師匠であるセレスにも話についていた。本人も知っている」

レクファを呼んで地図を持ってくるよう命令しているクラウドス。ルークはその初めて見た義兄の笑顔に胸を撫で下ろした。けれど、まだ気は抜けない。レオナを助け出すまでは。今まで散々助けてもらったのだ。今度はルークが彼女を助ける番。

クラウドスの顔を見つめながら、ふと扉の前でレオナの言った言葉を思い出す。

（あ、そっか。だからレオナさんはこの小妖精達の名前に聞き覚えがあったんだ）

将来使える主の配下。名前をもしかしたら師匠であるセレスに教えられたのかもしれない。戻ってきたレクファから地図を受け取ると、ルークは深々とクラウドスに頭を下げた。

顔を上げて、相手を見上げる。それは自分の支えを見いだしたからこそその勇気。弱い心を支えてくれる1つの真実に気付いたからこそ。

「それじゃあ、行つて来ます」

そう言うと、ルークは部屋を出た。城の階段を駆け下り、出口へと向かっていく。その足取りに迷いはない。1人ではあるが、先程のような心苦しさや寂しさは微塵も感じないようだった。

扉が閉まる音。それが城内に響き渡ると、小妖精は心配そうにルークの出たといった出入り口付近を見つめながら言う。

『大丈夫かなあ……』

『黒犬獣に会ったらどうしようなのー！』

オロオロ、わたわたと同じように空中を飛び回るレクファとリーファ。ルークが黒犬獣やアンシーリイ・コートに会った時、為す術がないことを2人は知っている。けれど、主の命令が無ければ動けないレクファとリーファ。ただここで心配しながら帰りを待つしかないのだ。

『クラウド王子、大丈夫なんでしょうか……？』

レクファがふとクラウドの表情を覗き込んだ。次いでリーファが

同じように顔を覗き込む。先に感想を述べたのはリーファだった。

『……？王子様、変な顔……』  
「うるさいぞ、リーファ」

するとクラウドは踵を返し、城内に戻っていった。城の廊下から暗闇の街を見渡し、月を見上げる。三日月は輝くような月光を廊下へと差し込んでいた。誰も知ることのない最果ての空の向こうから、変わることもない不変の光を。

月明かりが山道を照らし出した。そんな僅かな光だけを頼りにルークは地図を開く。寝静まった街は人の気配すらなく、見下ろした眼下の風景は時が止まったかのようにも思えた。とりあえず、街の全体を見下ろして場所を確認しようと切り立った崖から下を見下ろしたルーク。

先程の騒ぎとは打って変わって、黒犬獣の気配も舐めるようなゾツとする視線も、何も無い。時折吹く風がルークの茶髪を揺らし、果てしなく続く城下の街へと消えていくだけ。月明かりに浮かび上がった地図を見つめ、少しだけ苦笑した。あの小妖精達が書いてくれたのか、読めない文字で書かれた地名にしっかりと印が付けられている。どうやら、ここが目指す場所らしい。

「……さっきのお城があそこで、多分現在地がここだから……」

妖精の文字は人間の国で育ったルークには読めない。けれど、中央が国王の城だというトリクの言葉を思い出せば大体の位置が掴め

てくる。左右に首を振る木々が、微風に葉擦れの音を立てる。この静けさが安全という証拠ではないことをルークは知っていた。何処かにアンシーリィ・コートや黒犬獣が息を潜めているかもしれない。背後への注意は怠らないようにと、何度も後ろを振り返っては目的地である2子の城を確認した。

「レオナさん大丈夫かな……」

自分が依頼した側ではあるけれど、こんな大事になるとは思っていなかった。それに全ての原因は自分なのだ。助け出したら、謝って……そしたらレオナはどんな顔をするだろう？驚くか、怒るか、呆れるか……それとも。

「もう気付いているのかもしれないし……」

ルークはそう呟いて、ふと空を見上げた。上空の月が雲に隠れようとしている。月光が遮られていく様を見つめていたルークはふと地図が見えなくなること気付いて慌てた。

「えっ、あ、ちょっと待って……」

物言わぬ月夜にそう言うと、慌ててルークは地図を見ようと視線を落とした。だが、ルークの瞳は地図ではなく、自分の右手首に向かう。

「……え？あれ……？」

葉擦れの音に混じって木々の影が不自然に蠢いた。雲が月光を完全に遮った瞬間、それは足音を立てずに林から姿を現す。けれど、ルークの視線は地図を持つ自分の右手首に向かったまま。

走るとき、落としては行けないと無造作に手首に巻き付けた、カルナのミサンガ。それに取り付けられた青い石が微弱にだが光を放っている。月光にも似た、小さな灯り。光る石等というものは勿論人間の国には存在しない。妖精の国のものだろうか、と首を傾げるルーク。少ない光はあるが、それで地図を照らしてみる。僅かではあるが、役に立ちそうだ。

「えっと、この場所がここだったから……目的地のお城は……」

道に沿って人差し指を動かしてゆく。その感覚を記憶させ、今度はよく見えない実物の風景を目の前にして道を指差した。はっきりと確認することは出来ないが、確かに同じ道が街の東側に存在する。

「それじゃあ、あの道を行けば……？」

薄曇りの空から忙しく光り輝く球体が顔を出しては隠れ、隠れては顔を出しを繰り返していた。安定しない明かりの中で、ルークの視界に1つの光が見えた。起きている妖精でもいるのだろうか、と思ったルークだったが、すぐにそれが家の光ではないことに気付く。

真紅の、赤い光。燃え上がる炎にも似た、懐かしくも思えるあの小妖精の…。

「あつ……」

その時、月が雲の妨害を避けるように最後の光を空から照らし出した。その瞬間、地面がその灯りにしっかりと形を成し、ルークの姿もまた映し出された。姿を現すかのように全ての大地が浮かび上がってゆく。背後で蠢いていた気配も、全て。

「……月のない夜が再び我らの上を覆い尽くせば」

その言葉はあまりにも小さく、風の中へと消えた。足音もなく、それはルークの背後へと近づいてゆく。その気配は誰にも気付かれることはない。アンシーリイ・コートである彼女の、最も得意とする行動であるがゆえに。

赤髪が揺れた。風を受けて暴れる髪の毛を彼女は押さえようともしない。

「我が主の統治する世が訪れる」

ルークの背がその殺気を感じ取った。一瞬だけその言葉に反応する。それを目を細めて彼女は見つめていた。戦う術も持たない弱い半妖精。皮肉の笑みが零れる。少年の背中にはあまりにも無防備であった。

この背を一押しするだけで、彼はもう主の邪魔となることはない。何と簡単なことだろう。リキュアの瞳には珍しく感情が表れていた。優位に立った者だけの、勝者の笑みが。

「その世の中で邪魔となるものはたった2つだ。お前と、クラウド・セルデール」

ルークは一気に体を包んだ寒気に体を固くした。どうにかしてこの状況を脱しよう、そう考えた瞬間、首筋に冷たいものが当たる。月明かりの照らし出す中で、それは刃だとはつきり理解が出来た。無情にも最後の望みの存在を見せてくれた、月光の光によって。

リキュアはその真紅の瞳で少年を見定める。

「良いことを教えてやろうか、ルーク・クロートレン。邪魔者を一

気に消してしまう、唯一の方法を」

少年の耳元でリキユアは彼にとって最期となるであろう言葉を口にした。口元をつり上げ、それを告げる。木々のざわめきが木霊した。

「  
」

ルークの反応は、リキユアの瞳に確実に映されることはなかった。それを理解した瞬間にはもう、ルークの体が空中に投げ出されていたのだ。髪を逆撫でる感触と耳の中で木霊する風の音がルークの意識を消してゆく。その視界はもう、何も見つめていなかった。何を見つめる余裕もルークには無かったのだ。

何も考えられない、刹那の時。それがルークには長く、とても長く感じられた。それはまるで永遠のようにも思える。けれどそれは間違いではない。堕ちてゆくのだ、死によって与えられる漆黒の永遠へ。

(……母さん……)

風が止まった。

## 第4章1 王位継承

クラウドは息をついた。

緊張も恐れも今の彼には感じられない。不安など無い、と配下の小妖精にも断言しておいたのだ。けれど、彼の中には未だに引つかかるものがある。丁度自分の反対側に位置する第2子の席を睨みながら、彼はふと先日送り出してやった義弟の顔を思い浮かべた。

椅子に腰を下ろしたクラウド。そのすぐ後に2子であるデューン・アレースが姿を現した。クラウドより高い身長は母は違えど弟とは言い難く、黒い服を着る様は国民からも、『地獄の葬列者』とも呼ばれたことがある。もともと彼の母は南の海岸周辺で権力を振るっていたアレース家の者。血筋に問題有り、と国民は結婚に反対していた。

デューンは鋭い視線をこちらへ向け、目が合った瞬間すぐにそれを逸らした。それは逃げたのではなく、単にこれから始まる王位継承式に向けた対立の証だ。2子の視線をまともに受けて見返せるのは義兄であるクラウドだけであろう。この男の視線は何者をも恐怖の底に陥れる程の威厳がある。否、それを威厳と考えるはおかしいかもしれない。

（威厳というのはただ睨みつければ良い、というものでもないだろう）

クラウドはそう思い、視線を会場へと彷徨わせた。するとデューンの後を追うように現れた3子、ブラーフ・サルトの姿が見えてくる。後ろに従えているのは、配下の妖精だろう。3子は何かに怯えるようにあたりを見回しつつ、自分の席へ腰を下ろした。巨体に反する臆病者。その割に食い気は人一倍だと噂されている。

（王権争いから外れたか……無難な考えではあるな）

珍しく、とクラウスは付け足した。3子は何かと2子の後をついて回る。もとより、アレーヌ家とサルト家は少なからず繋がりがあるとされていた。良い意味でも、悪い意味でも。サルト家から極秘にアンシーリイ・コートの部下をアレーヌ家にまわしている、という噂もあった。

（リキュアという部下か……あれを見れば一目瞭然だが）

サルト家は国民の間からは信頼が薄い。だが国民からの反対を受けても国王が結婚した理由は背後にあるアンシーリイ・コートの脅威を少しでも鎮める為だ。アレーヌ家も同様の理由。だが……後ろにどんな血筋、関係があるうとも国王は力量によって決められる。

クラウスは彷徨わせていた視線を、不在となっている4子の椅子へと向けた。ルークの生まれた頃に設置された椅子は自分よりいくつか隣の場所にある。けれど、そこには今日もその姿はない。

（……）

何を思うでもなく、クラウスは視線を戻した。高らかに鳴り響く楽器の音色と共に、国王が姿を現した。妖精王バルク・セラヴル。見事なまでの茶の髪とそこから覗く瞳は王としての威厳に満ちている。クラウスより頭半分くらいの背の違いしかないが、それでも彼の前に立つと自分より遙か天上から見下ろされている感覚を覚えてしまう。クラウスは他の兄弟の誰よりも早く頭を下げた。自分の前を通り過ぎる場合頭を下げるのは礼儀である。横目で他の2人の様子を見つめると、デューンは口元だけの笑みを浮かべて軽く会釈をし、3子のブローフは肉だけの短い首を動かしづらそうに傾けた。

丁度中央に用意された椅子に腰を下ろすバルク王。その視線が3人の息子達、そして空席となった4子の椅子へと向かう。クラウドはその様子に密かに息を吐いた。もし、ここにルークがいたとしたら必ず王位は彼のものになっているだろう。本人がどんなにそれを拒んだとしても。

国王の側近が前へと歩み出て、1つ咳払いをした。開式の宣言に立ち会う者達の緊張がはしる。王の部下、3人の王子、そしてその部下。残るは各地方を治める者達だ。国民はこの場に居合わせることは出来ない。

クラウドはふと反対側の席に視線を向けた。その刹那、珍しく笑みを浮かべたデューンの視線とぶつかる。彼は横に従えていたりキユアに何か指示をし、音を立てないように席を外させた。

訝しげな表情をしたクラウド。その瞬間、静寂を破ってデューンは声を上げた。突如席を立った2子の姿に、周りの視線が集まる。

「お待ち下さい」

久方ぶりに聞いたその声にクラウドは一層怪訝な表情を見せた。しかしデューンはその黒髪から覗く瞳を国王に向け、『地獄の葬列者』には似合わぬ大きな声を響かせた。生来、この義弟が喋ることは殆どと言ってよいほど聞いたことはなかった。今回のように式を中断させたことも初めてなのだ。

（何をする気だ……？）

クラウドはデューンの顔を睨みつける。

「父上。父上は今回の王位継承人を、お決めになっていることと思います。私か、『兄上』であるクラウド・セルディールか……」

横目でクラウドを示したデューンはふと不気味な笑い顔を浮かべた。丁度そこに席を外していたリキユアが戻ってくる。彼女は何かを手渡すと、すぐ後ろの席に戻った。

国王もまた訝しげな目で息子を見つめている。彼にとっても、この第2子が喋るところを見るのは久方ぶりなのだろう。デューンは続ける。

「……ルーク・クロートレンか」

クラウドと国王が反応したのは同時だっただろうか。クラウドは発言することは出来なかったが、代わりに国王が口を開いた。ルークを見つけたという1子の報告は国王の耳に届いている。城を出ていった、という事実も。

「ルークは見つかったものの、城を出ていったとクラウドから報告があったのだが」

出ていった理由をクラウドは言わなかった。ただ王位を拒否した。と。まさか義兄であるデューンに恩人を捕らえられ、助けに行ったなどとは言えない。それはあまりに醜い発言であり、父である国王に裏で起こっている息子達の権力争いなど見せたくはなかった。

「はい。……ですが、彼はもう王位が継げる状態ではありません……」

意味深に話を曇らせるのは、父親であるバルクの注意を引くためだ。長年こうだった場での発言を避けてきた割には芸を覚えるものだ、とクラウドは心の中で毒づいた。国王はデューンの予想通り、彼の話に食いついてきた。失踪した自分の息子。しかもそれが溺愛

した4番目の后との子なら尚更だろう。

「デューン、どうゆうことだ」

この時はつきりとクラウドスはデューンの笑った表情を確認した。もつともらしく見せる為に顔を下に向けた様子。こちらからなら一目で分かる。髪の間から出た口元は相手を皮肉ったようにつり上がっている。

デューンは口を開いた。その言葉に城内は騒然とした。

「我が兄、クラウドス・セルディールが殺したのです。我らが弟を」

信じられない一言にクラウドスはただ相手を見返すしかなかった。

この空間にいる者の視線が全て自分に向けられている。クラウドスはその数えきれない程の視線を浴びて、辺りを見回した。配下の者達も一斉にこちらを振り返っている。国王であるバルクさえも。

クラウドスは我に返って席を立った。

「何を証拠にそんなことを言う」

驚きが怒りへと代わるのに時間はいらなかった。しっかりと相手を睨みつけ、会場の中央で2人の王子の視線が交わる。しかしそんな義兄の様に臆することせず、デューンは言った。

「私は配下の者を使い我が弟を捜していたのだ、クラウドス・セルディール。そして彼がこの国に彷徨いこんでしまっただけ、な」

デューンは余裕の表情で会場を隅から隅まで見回した。この空間にいる全てのものにまるで言い聞かせるようにルーク殺害の様子を

語り始める。

「彼は数日程前、兄上であるクラウドスの土地に彷徨い込んだ。あそこには崖が多いことは皆よく知っていると思う。そこから…我が弟は突き落とされたのだ」

「その何が証拠だ！私が殺したというはつきりした確証がないだろう！」

クラウドスは身を乗り出してそう叫んだ。しかしデューンはそれを無視したかのように、主張を続ける。国王は椅子に腰かけたまま、2人の様子を目を細めて見つめていた。会場にザワザワとした空気が漂い始める。

「兄上の部下が、と言った方が正しかったか。偶然近くを通りかかった私の部下が小妖精の姿を見つけてな。様子がどうもおかしいと後をつけていたのだ」

振り返ってリキュアを示した。彼女の表情は無表情ではあったが、主の視線にしっかりと頷いてみせる。部下と聞いたクラウドスは瞬時に自分の後ろにいたレクファとリーファを振り返る。しかし2人は同時に首を左右に振った。

『私達そんな事してないのーっ！』

『そ、そうですよ、きっと何かの間違……』

レクファの答えを遮ってリキュアが席を立った。赤い瞳の中に余裕の表情が込められていることは小妖精とクラウドスにしか見てとれなかったであろう。

「ならこれはどうだ」

短くそういったリキュアは主の席の隣に置いてあったある物を手に取り、それを広げてみせる。それはレクファの名前入りのハンカチ……どうやらルークに手渡したもののらしい。クラウスは小さく舌打ちをした。信用はどうあれ、目撃者と名乗る者がいる。そして、証拠ととれる物があるのだ。今更どんな真実を述べようと、誰も信じる者はいないだろう。

隣を浮遊しているレクファを睨みつけると彼は沈んだように下へと落ちていった。慌てたリーファに持ち上げられ、椅子につく。その様子を見つめていたデューンが今が好機と声を張り上げた。

「国王、これを踏まえて継承者のご判断を！」



るカルナに会場は騒然としていた。2人の小妖精もカルナを見上げて、まるで化け物でも見たかのように口を開けてパクパクしている。城内の者も皆同じ反応をしていた。その中で、クラウドの声だけが響く。

「口上は後にしてくれないか、セレス・カルナ」

「おっと。怖いねえ相変わらず、クラウドは……。あ、そういえばアンタの今の芝居、上手かったよ、私の次くらいに。今度どうだい？ウチの弟子とタッグ組んで上演でも」

クラウドは盛大に息をついた。肩をすくめた様子にやっと本来の仕事の思い出したように国王、そしてデューンに視線を向けるカルナ。

「私は4大魔女の1人セレス・カルナ。クラウドに依頼を受けて見張らせてもらったよ、デューン・アレース！アンタの悪事は全てね！クラウドの容疑を晴らす人物だってちゃんここに……。って、何してんだい！」

セレスの横にいた人物は顔を真っ赤にして下を向いた。皆の視線を受けているセレスは下の階に見えるように彼を引っ張り出す。珍しく抵抗を見せる相手にセレスはその背を強く押した。瞬間、手すりの向こうに体が半分突き出される。

「えっ、あ、……。そ、そそその、あの、えっと……」

顔を真っ赤にして視線を彷徨わせる彼に呆れたようにセレスが大声を上げる。その姿が観衆の視点を集めた瞬間、何処かで椅子を倒す音が響いた。

「これがあんたらお探しの、第4子ルーク・クロートレンだよ！……ってこら、ルーク、逃げんじやないよ！」

「か、カルナさ……じゃなかった、セレスさん！そんなこと言ったって……」

「いいじゃないかい、城内全体アンタの話題でいっぱいだよ。よっ、有名人！」

セレスに茶化され、皆の視線を浴びてルークはますます赤くなつた。背中を叩かれ、とりあえず何か言わなくてはと口を開く。

「え、えつと……こんにちわ」

セレスとクラウド、そしてレクファとリーファが同時に頭を押さえた。その様子に困つたような表情をしながら、ルークは言葉を続ける。

「あの……僕、お城を出た後、森に向かったんです。レオナさんの居場所を探して……」

風が止まった。その瞬間、ルークの体は地面すれすれで止まり、ゆっくりと着地した。目を瞑っていたルークにはそれが理解できず、首を傾げた。

「……えいやつと」

刹那、そんな掛け声と共に体が木々の間に引きずり込まれた。驚

いたルークの視界に入ってきたのはルークを引つ張り込んだ張本人、カルナと先程見た赤い光……トリクの姿があった。

「！……ふがつ」

「騒ぐんじゃないよ、ルーク。騒いだら、ただじゃおかないからね」

脅迫紛いの発言で口を塞ぐカルナ。明かりを暗くしながら息を潜めるトリク。2人の視線は共に崖の上へと向かっていた。どうやら先程ルークの背中を押した人物がこちらを……否、崖下を見つめてルークの生死を確認しているらしい。

小声でトリクが呟いた。

『幻でも見せた方がいいんじゃないか？』

「そんなことしたらあの女、一発で気付くよ。それに……この場所は滅多に人が来ない。足の骨でも折れば、黒犬獣に喰われるか野垂れ死ぬかのどっちかさ。あんたはどっちがいい？トリク」

小声でうえ、と舌を出したトリク。数分間空中を彷徨いながら考えて、ルークを恨めしそうに見つめるとこんなことを言った。

『……俺様、ガキにつぶされる以外ならなんでもいいかも……』

どうやらトリクはルークの家に置いて行かれたことを根に持っているらしい。ゴメン、と頭を下げるルークに顎を突き出して不良の真似をしている。上を見つめながらもその様子に気付いたのかカルナは行った。

「ふっ、そうかい。わたしや出来ることなら縁側で茶でも飲みながらぼっくり逝きたいね」

年齢に似合わない発言だと突っ込むものは誰もいない。ただトリクは変な汗をかきながら、ルークに向かって更に小声で言った。

「……あり得ねえ……っ！」

「何か言ったかい？」

振り向いたカルナにルークは尋ねる。

「カルナさん、さっきの人は……？」

「行っちゃったよ。もう大丈夫さ。アンタがコレを付けていたおかげだよ」

カルナはルークの手を取ると、その手首にあったミサンガを示した。石がまた青く光っている。ルークは首を傾げると、カルナは豪快に笑って見せた。

「これはね、アタシの魔力のカケラさ。アンタの居場所が一発で分かるように、持たせたんだよ」

そう言うときカルナはその石を強く握りしめた。一瞬その指の隙間から閃光が走る。そしてカルナがその手を開くと、そこにはミサンガしか残っていなかった。ルークは感嘆の声を上げる。

「うわぁ……」

「これはやるよ」

残りのミサンガの部分をカルナはルークに手渡した。その様子を見ながら見ていたトリクは、疲れたというような顔をしながら首を鳴らす。

『さつて、そんじゃ半分壊れた豚小屋に帰るとするか』

その言葉を聞いてルークは顔を上げた。レオナの救出が自分の目的なのだ。慌てたように立ち上がった様子を林から出たカルナが言う。

「レオナならまだ捕まっけてもらわないと困るんだよ、ルーク」

ふとルークの足が止まった。振り返って困惑した表情をしている少年にカルナは諭すように頭を撫でてやる。トリクは首を回しながらその様子を見守っていた。

「……え？」

「レオナは王位継承式の時に2子とあの女のいないところで隙をついて逃げ出すのさ。大丈夫、牢屋に魔法は掛けてあつたけど解除の仕方は教えてきたし、第一そんな簡単に殺されはしないよ。アタシの弟子はね」

ルークはカルナの自信を込めた言葉に促され、ゆっくりと頷いた。不安は心に引つかかつてはいたが、危険に陥ればいつでも抜け出せる状況にあるという言葉に落ち着きを取り戻す。そしてやっと気付いた。

「……弟子？」

『ルークのその天然、すんげー懐かしいわ、俺様』

トリクが嬉しいのか呆れたのかよく分からない息を吐いた。滑りやすい傾斜を余裕の表情で歩いてゆくカルナを見つめてさらに首を傾げた。トリクに助けを求めても、自分で聞けというような返答してしてくれない。

「あのっ、カルナさん！」

「あ、そうそう、レオナを助け出す時に、2子んとこに捕まってる人間も助け出すから、よっく覚えとくんだよ、ルーク！その後は王位継承式に殴り込みだよ！」

「はい！……って、ええっ、殴り込みですか！？あ、そうじゃなくて、その、弟子って……」

カルナを追いかけてゆくルークの背中を見つめながら、トリクは盛大な溜息をついた。また顔を出した月を見上げて、語りかけるように呟く。

『「アレ」がレオナの何十倍も生きてる4大魔女だとは思わねえよなー、普通』

月は何も言い返しはしなかった。ただただ、トリクの溜息を葉擦れの音の中に響かせるだけ。

「と、いうワケさ。観念しな、デューン！」

いつの間にかルークの台詞を奪って、手すりに片足を掛けてそう叫んだセレス。その様子にクラウスは軽く頭を押さえた。ルークが一生懸命隣で「カルナさん、スカートっ」と慌てている。

クラウスは息を吐き、そして反対側の椅子にもたれている義弟を

見つめた。

「……どうやら裏の裏をかいだつもりだろうが……私の方が一枚上手だったな」

笑みが浮かぶ。久方ぶりに見る、デューンの蒼白な顔を見れば当然のことだ。上の階で豪快な笑い声を上げているセレスを睨みつけ、息を吐く。隣に控えていたリキュアは腰に下げていた剣の柄に手を伸ばそうとしていた。しかし、それを制したのは主の右手だった。

（……ここで手をだせば、完全に信用を失う。懸命な判断だな、  
我が弟」）

クラウドは勝者の笑みをたたえてそれを見つめていた。そしてふと2階に視線が釘付けとなった国王の姿を見つめる。自分は勝者ではあるが、王権は望めないとクラウドは自分に言い聞かせた。

「……父上」

クラウドの声に我に返ったかの表情を見せる妖精王。観衆の視線も配下の妖精達の視線も、義弟達の視線もクラウドに向かった。

「彼を殺そうとしたことは万死に値します。……ですが、彼は『我が弟』。父上にとっても大事な息子でしょう。そこでこうしてはいかがでしょうか」

デューンの視線とクラウドの視線が絡み合う。それは最初にこの会場で目を合わせた時のものとは全く違った。立場逆転の優位を誇ったクラウドは彼を罰する一番の方法を知っている。

「……王権剥奪、というのは」

それは一番の屈辱。それでも聴衆や国民からすれば軽いものなのかもしれない。けれど、王権を巡って争ってきた者としてその言葉は万死より重い。今までの苦勞も、全てが水の泡となるのだ。

（皆の上に立つ者、彼を殺すことなし。そしてまた逆に彼を殺す者皆の上に立つことなし。……信賴とは脅しで得るものではない）

そう思えば、ルークは王の座に一番適した者かもしれない。会場からの賛成の声と罵声。デューンはこちらを一睨みして席を立つと雑音の中で姿を消した。それを追うようにリキュアもまた退出していく。残された3子のブラーフも決まり悪そうな表情をして会場からひっそりと逃げ出した。皆の視線が行方不明となっていたルークへと向けられていた。その中で、クラウスは1人、席を立った。

ルークがやっとともに会場を見回せるようになった頃には何処を探してもクラウスの姿は無かった。配下の者達も慌てたように辺りを見回している。ふと頭を押さえたように溜息をついたセレスが、一階へとルークの手を引いた。

階段を下ると、真正面に妖精王の姿が見える。気恥ずかしそうに頬をかくルークを赤絨毯の上を堂々と歩きながらセレスが引く張つてゆく。無遠慮に王の前まで来たセレスは最後の一押しをルークに加えた。

「ほらっ、親子の再会でも盛大にやっつくれ」

押し出され、慌てたように振り向くルークにセレスは口元を上げて言う。

「どんな茶番劇であっても、お涙頂戴は鉄則さ」

ルークは何か言おう口を開き、そして止めた。なにかを堪えるように口を閉じ、下を向いて、振り向く。国王の椅子は今まで見たことのない程大きなものだ。けれど、そこに座っているのは自分の父。自分を愛して、探し続けてくれた本当の父。

自分は愛されないから捨てられたのだと、思いこんでいた。けれど強がって、ここまで生きてきた。義父と義母の愛情も嬉しかったけれど、心の何処かで本当の両親の言葉が欲しかった。

王はルークの心に気付いたのか、立ち上がって微笑ってくれた。そして、手を広げて言う。言い慣れていない言葉だろうが、王は言うてくれた。……ルークの為に。

「……おかえり、我が息子よ」

ルークは涙を堪えて、その胸に飛び込む。

### 第4章3 道しるべの子守唄

廊下はもう暗くなっていた。城使いの者が明かりを灯すのを忘れていたのか、真っ暗にも近い。今日は新月だと思い出したクラウスはふと向こうから歩いてくる者の姿に視線が向いた。右手に浮かべた小さな炎が揺らめく。それがレオナだと理解するまで、クラウスには長い時間がかかった。

「……レオナか」

「久しぶりね、王子。何年ぶりかしら」

壁に背をもたれたクラウスは目を細めてレオナを見た。セレスに手を引かれて初めて城に来たのは多分2、3年ほど前。あの頃はまだ自分の腰ほどにも満たない子供だった。人間の国の時間の流れと妖精の国の時間の流れは違う。妖精の国の1年は人間の国のその5年だというのだ。まだ自分の名前を名乗るのにも時間を掛けていた少女が、もう一人前の大人と同じようにここにいます。

「2、3年……だな。人間の国は本当に不思議なものだ」

「私にとつてはこの国の方が不思議よ。いつまで経っても変わらない……不変は良いことだけど、刺激のない世の中は嫌い。あの師匠のせいかしら」

会場から漏れる光を見つめながら、レオナは長い髪を耳にかけた。ふつと右手の上に浮かんでいた魔法の火を吹き消すして、クラウスを見つめる。

「継承式が始まるわよ、王子。行かないの？」

「……継承されるのはルークだ。嫌がってはいたが、押しつけられれば断れまい」

訝しげな表情をするレオナにクラウドはそれだけ言って窓から外を見つめた。星だけが浮かぶ夜。長年争ってきた王権を、それを望まない者にとられるのはどうしてか滑稽ではない。

レオナは溜息をついた。

「……王子。貴方は王になりたくないの？」

その言葉にふとクラウドは視線をレオナに向けた。いつか自分直属の魔術師となるレオナの視線。強い瞳に、自分の人選は間違ってはいなかったとクラウドは確信する。彼女は本当に良い魔術師になるだろう。セレスが認めるまで時間がかかりそうだが。

「なりたいな。それは。……しかし父上の要望なのだ、仕方がないことだろう」

「……王子。あんた意外と馬鹿ね」

即答でレオナはそう切り返した。馬鹿と言われた経験は勿論皆無の王子、クラウドは首を傾げて振り返った。しかし、クラウドがその言葉の真意を確かめる前にレオナがその右手を掴む。

「私だって馬鹿な王子の下っ端なんて嫌よ。それに……」

光の漏れる入り口へと引つ張ってゆくレオナ。その背中と力一杯押しやって、そして微笑んだ。会場の光がクラウドを包む。いつも何とも感じることはない明かりにクラウドは目を細めた。

「どうせ仕えるのなら、『国王』の下がいい。あの馬鹿師匠ならそ

う言っんじゃない？」

クラウドの視界を真っ白な世界が覆った。そして次の瞬間に聞こえたのは、歓声か。それは定かではない。クラウドは夢心地のような気分の中にいた。反響する歓声も、いつもより光を増したような会場の明かりも。

国王の隣で拍手を向けているルークの姿、そして豪快に笑い声を上げるセレスの表情。冠を手に自分を待つ国王。全ては、自分の待ち望んだ光景。

（ああ、そうか……。そうか、そうだな）

レオナの言葉が思い出された。王になりたいと言ったのに、何をしているんだと、彼女は言いたかったのだ。馬鹿、と言われた意味もようやく分かった気がする。

（待っているじゃないか、私を）

そう、自分の手で掴み取った勝利は自分のものなのだ。クラウドは笑う。2度目だろうか、心からの喜びの笑いを。ルークのひたむきな姿を見るまで忘れていた笑うという感情。

脅しは威嚇ではないと思ったのも自分だった。

（……確かに馬鹿だな、私は。けれどそれでいい）

クラウドは赤い絨毯を踏みしめた。夢にまで見た、王位継承の瞬間を現実のものとして。

（だからこそ私は国民の信頼を集めることが出来るのだ）

父の顔は穏やかだった。昔から威厳も持ち合わせたその背中を見つめて育ってきたのだ。クラウドは階段を登る。一步、また一步と、自分の夢への実現へ向けて……。

「だから、その魔法陣の書き方間違ってるって言ってるでしょう！」

暗闇の中で明かりの役目を負っていたトリクが浮遊する。その光で地面と睨み合っていたレオナが、先程見つけた魔法陣の呪文の誤りを怒気も込めて指摘した。だがそれをセレスは慣れた様子でかわしていく。

「いちいち煩いねえ。こんな細かいトコ、そんなに気を付けなくても大丈夫だよ。大体、いつからそんな小姑みたいな性格になったんだい、レオナ」

「136歳に言われたくないわ！」

「見た目が若けりゃいいのさ。ほら、こんなにピッチピチ」

『俺様早く帰りたい……』

セクシーポーズをとってみせるセレスにレオナの怒りがまた爆発した。疲れたようにそれを見つめるトリクがその周りを飛び回っている。

ここはクラウドの城の敷地内。国と国の境目で起こる時間の圧力を最小限に押さえるため、セレスとレオナが魔法陣を書いていた。ルークを安全に人間の国へ返す為の魔法だとレオナは言っていたの

だが、今の2人の状況を見れば安全という言葉も危うい。ルークは変な覚悟を胸に秘め、大規模な魔法陣が完成するのを待った。

レオナがルーク達と合流したのは、継承式で手薄となったデューンの城から抜け出した時だった。扉を通さなくても無事に帰れるというセレスの魔法を使い、捕まっていた人間達を送り出した後、式場へと向かったのである。どうやら、セレスの言っていた『発明家』の様な仕事というのはどうやら、魔法の発明だったらしい。

そんな師匠の大規模な趣味にレオナは大袈裟に溜息をつきながらルークに言った。

「あつちの世界に帰ったら大騒ぎね。まあ、事後処理は町長にまかせるわ……。しばらくは神隠しだの何だのってうるさくなるだろうけど」

ルークはそれを思い出して笑う。皆の驚いた顔を思い浮かべると可笑しくて仕方がなかった。当分ミステリアスな体験話が街中で流行するだろう。

1人そんなことを思いながら笑みを浮かべるルークに、クラウドが声をかけた。

「何を笑っているんだ」

突如後ろから声を掛けられ、ルークは驚いたように振り向く。それがクラウドだと分かれると、安心して息をついた。クラウドの呆れたような表情を見ると、自分はどうやら端から見ていて凄く変だったのだろう。

しかしクラウドはルークから視線を外し、向こうで喧嘩をしている魔女とその弟子を見つめた。喧嘩、と言ってもレオナが一方的に怒鳴りつけ、それをセレスが軽くかわしているだけなのだが。

「……帰るのか」

「あ、はい。皆、心配してるかもしれないから……」

けれどあの様子を見ているとまだ当分帰れないような気がしてきた。ルークは苦笑しながら義兄を見上げる。白んできた空の下でも彼は造り物のように端正な顔をしていた。本当に血が繋がっているのかルークでも不思議に思う。

「父上はまた会いたいと言っていた。……たまにはこちらに来い、と」

「はい！」

ルークは満面の笑みでそれに答えた。その嬉しそうな笑顔にクラウスも笑う。

「まあ……人間の国とこの国の時間の流れは違うからな。すぐに顔を出すだろうと言っておいた」

セレス達の様子を眺めているのに飽きたのか、トリクがふよふよと飛んできてルークの頭に止まった。眠いのか欠伸1つしてクラウスを見る。

『ふあゝあ……そっぴや王子。ルークの母ちゃんって結局どうなったんだ？』

後からレオナとルークを追いかけてきたトリクは事情を全てセレスに説明された。すべての発端を聞かされたトリクには1つだけ首を傾げざるを得ない部分に気付いていた。それはルークの母がその後どうなったか、である。

クラウスはふとかたわれ時の空を見上げた。雲が白み始め、ゆっ

くりと青空が姿を現してゆく。新月の夜の終わり。これから、最も賑やかな1日が来るであろう。新国王の決定の知らせと共に。

「そこまでは私にも分からない。…ただ、ルークには悲しいことかもしれないが、人間は時間の圧力に負けると向こうの空気に触れた途端、灰になると聞く」

灰、という言葉にルークは同じように空に向けていた視線をクラウスへと戻した。首を傾げて、昔ルーシーや義父に聞かされた話を思い出す。15年前、自分が捨てられていたときの話だ。

赤ん坊だった自分が、灰の中に捨てられて……

ルークはその時、また心の何処かであの子守唄が反響したような気がした。優しい響きを醸し出す、春のように暖かく、母の腕の中のような安心する旋律。琴線に触れる柔らかな響き。それはもう、彼自身がその思い出にすぎろつとしたからではなかった。

「ルーク！出来たよ。おいで」

疲れた表情のレオナの隣からセレスが手を振っている。ルークはそれに答えるようにそちらに向かって歩き出した。ふと後ろからクラウスの声が響く。

「時間を作ってた来い。父上も……私も、待っている」

振り返ったルークはそれに微笑んで頭を下げた。

「ありがとうございます！」

地面に白い粉で描き出された奇怪な文字と絵のようなもの。外側の円から鎖のように真ん中へと線が引かれている。ルークにはその魔法陣の意味を理解することは出来なかったが、これだけの細やかな魔法陣を書き上げるのには並大抵の者には出来ない。改めて4大魔女セレスとその弟子レオナの凄さが身に染みた。

ルークが魔法陣の中に入ると、一番外側の線が光を放った。そして順々に内側へと光が移動していく。白い閃光にルークは目を瞑った。後ろから詠唱を始めたセレスとレオナの声が耳通りよく響き渡る。

「……天在り地在り光在り。闇は乗じて光と在り」

「神名天上、真名地上。異端なる者に理の加除」

セレスの呪文を聞くのは初めてだったが、彼女がそう声をあげた時、レオナの詠唱には見られなかった程地面が光り輝いた。目を瞑っても、そこには光が存在する。

「尊崇されし、世の神在り。数奇なる者の運命よ」

レオナはそこで言葉を切った。ルークは扉の時とは違う、強い風を体を感じる。そしてセレスの言葉が聞こえたとき、それすらも止んだ。

「廃滅無しと我等に誓えよ」

光の中で、ルークは1つの夢を見た。

『天の目の如く、光揺れ  
幾許清き 風は吹く』

声は夏空の下、その直線的な日光の日差しの中で響いていた。女はそれを見上げたまま、歌い続ける。周りを取り囲む森の木々は唄に合わせるかのように左右に揺れ、葉擦れの音は音程の無い、ひとつのリズムを形作った。

久方ぶりに見る故郷の風景は、変わり果てていた。昔のようにぽつぽつとしか並んでいなかった家々が集まり、1つの集落となり、街へと変化していた。思い出せる限りの場所はもうそこにはなく、1人になってしまったかのような気分さえ覚える。

『千の護りと証を持つて  
汝、扉の鍵とせん』

けれど覚悟は出来ていた。そう女は思った。果てしなく続く青空は何処も同じ。今までの世界も、この世界にもそれは変わりはない。ふと草むらに腰を下ろし、眠る子供を見つめ、彼女は旋律を紡ぎ出す。子守唄を子守唄として。そう、すべては自分の子供の為。

『氷雨の降りし国なれば  
亡者行き交う、刻苦の地』

昔、妖精の国への扉が無かった頃。その頃、国への道は3つあったという。この子の物知りな父親に聞いた話だ。彼女はそれを思い

出し、ふと微笑みを浮かべる。

『紅ひ薫る 誘いの地

その心 その場に許すことなし』

1つは地獄。2つ目は人を誘う楽園、天国。そして3つ目は、「妖精の国」。

『真の未知を望みし者は  
証を持つて答えたり』

子供達が道に迷うことのないよう、母はそれを子守唄にした。そしてそれはそのまま、扉の鍵とされ、合い言葉となった。子供を愛する母の想いがつくった、最高の言葉。記憶にも残らないかもしれない。けれどきつと形にならなくても、その真実はいつか最高の奇跡へと変わってゆく。

『鍵を唄うは眠りの精

子よ、その言葉が鍵なれば  
忘ることなく、汝の中に……』

太陽の日差しを受けた茶色の髪が輝く。最後の言葉に、何も語らぬ木々はただ黙ったまま枝を揺らした。首筋を撫でる涼風は心地よい。それは静かな寝息を立てている彼の心の片隅の何処かにしっかりと残る。そう、これは夢ではないと今のルークははっきり感じる事が出来た。

新緑が光を受ける様は美しかった。そして彼女を照らす燦々とした太陽もまた然り。ルークは第3者の視点で見つめる遠い記憶に暖かい感触を覚えた。ふと、彼女の視線が子供を抱く腕に向けられた。爽やかな風と共に自分の体がゆっくりと灰に変わり、流れて消えて

ゆく。灰の混じった微風が蒼天の空へと舞い上がる。ゆつくりと、母の体は灰へと化した。

しかし、彼女の微笑みは最後まで消えることはない。安らかに眠る我が子の為に。そしてルークは、微睡みの中でたった1つの旋律を耳にした。それは、子守唄の2番。込められた、大切な意味。

『四維にて吹く風に

我、塵灰となろうとも

想いは此処に

守りは其処に』

この風に私が灰になったとしても。貴方を思う想い、そして護りは此処に。

『汝、光の子となりて

たとえ標に惑わされしとも

久しき日を思ふことなかれ』

貴方が王の子として運命に惑わされたとしても、別れの日を思い出すことのないように。

『我、風と共にあり  
我、光と共にあり』

私は風と共にありましょう。光と共にありましょう。

『汝を包むものとなりて

汝と共にあろう……』

最後の言葉は悲しくも、塵灰と共に夢の中に消えた。ルークは視界が滲んだ気がしたが、それでもそれを堪えて見上げた青空がはつきりと彼の瞳に焼き付く。母はルークが別れの日を思い出すことを望まなかった。それが辛いものだ、知っていたから。だからこそ、彼女は彼の中に自分の記憶を残したくはなかった。

しかし、ルークの中にはその子守唄がはつきりと残っている。

(……うん。大丈夫だよ、母さん)

ルークは体が一気に軽くなるような感覚に陥った。灰の中でスヤスヤと眠る15年前の自分の姿に微笑み、別れを告げるとゆつくりとその風景はルークから遠退いていった。多分もう見ることはないであろう、母の思い出。けれど、それはきつとルークの中に永遠に残るのだ。

(……………ありがとう)

視界が光に覆われる。暖かな、母のような光に。

突如、ルークの視界は反転した。盛大な音と共に床へ投げ出されたルークとレオナ。強かに腰を打つ2人を見下ろしながら、セレスは優雅に床へと降り立った。仲良く腰を押さえて同じ格好をしている2人に彼女は笑ってみせる。

「おやおや、若いもんがだらしないねえ……………」

レオナがその言葉に反応したようにセレスを睨みつけた。それを笑顔でかわし、セレスは階段を登ってゆく。ルークは服についた埃を払いつつ、ゆっくりと降りてきたトリクに問いかけた。

「……………ここ、は？」

『俺様の見間違いがなければ、書庫だな』

そこは確かに、ルークが初めてセレスの家を尋ねたときトリクに連れてこられた書庫だった。地下のせいか、気温が低く、息が白く染まっている。ルークは手を擦り合わせながら、トリクの明かりを頼りに先に行ったレオナとセレスを追った。

「それじゃあ……戻ってこられたんだね」  
「……」

微笑むルークに頬をかいて非常に気まずそうな顔をしたトリクは、曖昧に笑って見せた。その様子に首を傾げるルーク。しかしその原因は階段を上がり1階に出た瞬間に向こう側から響いてきた。

それは例によって例のごとく、レオナの怒鳴り声だ。

「ちよつとセレス！これ一体どうゆうこと！？」

驚いたようにトリクと顔を見合わせたルークは声をした方向に走り出した。すると散らかった玄関から何かを掘り出しているセレスがあっけらかんと窓の外を見つめて、見たままの言葉を返した。

「雪だね、間違いない」

「何、呑気に解説してるのよ！これじゃ、ルークが帰れないじゃない！いい！」

レオナの指差した先には、秋の紅葉し始めた時期から1歩とんで純白の光に輝く積雪。膝以上に積もった雪の風景は果てしなく向こうまで続いている。白い妖精のように絶えず降り続ける粉雪にルークは呆然とする。妖精の国と人間の国は過ぎる時間の早さが違うとクラウスに教えられていたのを忘れていたのだ。

するとレオナの言葉に耳を塞ぎながらセレスがトリクを指差した。さつさと逃げる準備をしている小妖精にカルナは微笑みかける。否、それが微笑みと取れるかどうかは人次第だろうが。

「私に言うんじゃないよ。トリクだって気付いていたんだ。な、トリク」

アンタが追いかけて来た頃にはもう雪が降ってたんだろ？と有無を言わさぬ強烈な笑顔を向けるセレス。その笑顔から醸し出される最上級の寒気にトリクは固まった。それを庇うように立ちはだかったレオナがセレスを見上げる。

「人のせいにしないでよね、馬鹿師匠！今すぐルークを街に送って頂戴。皆心配してるでしょう！」

するとセレスはチラ、と横目でルークの様子を見つめると視線をレオナに戻した。面白い事を考えついたというような悪戯な笑みを浮かべて弟子を見つめる。

「それなら、レオナ。お前が魔法で送ってやりな。……さすがアタシ、頭いい。じゃ、そういうことで」

レオナに反論を言わせる隙も見せず、セレスは玄関の扉の向こうに消えた。レオナが慌てたようにその扉を押し開ける。

「ちょ、ちょっと待ってよ、人を転送する魔法はあんたが発明したものであって、私は教わってな……」

立て付けの悪い音を響かせた扉。しかし、その向こうには足跡の1つも残らない銀世界が果てしなく続いている。彼方まで真っ白な空間に吸い込まそうになりそうだ。レオナは体から力が抜けたかのようにドアノブを握ったまま玄関に座り込んだ。セレスの姿はもう見あたらない。

完全に負けてしまったレオナは疲れたような視線を後ろにいたルークに向ける。

「……で？どうするのルーク。どうやら当分ここにすることになり

そうよ。一応念のためトリクに手紙を運ばせてルークの無事は知らせなきゃだけど」

『待てレオナ、この雪の中かよ!?!』

「当然でしょう! トリクが早めにそう言っていれば、あの馬鹿師匠に魔法陣の行き先を尋ねておくこともできたのよ!?!」

レオナとトリクがそう言い合う様子を、どうやら台所にいたらしいメニカが扉の隙間から覗き込んでいた。どうしたものか、という視線を向けるルークにメニカは相変わらずわたたと慌てた表情を見せた。トリクとレオナの言い争いは、レオナが優勢になりつつある。

なんだかもう慣れてしまった妖精と魔女の弟子との日々。全てはあの日、初めて魔女の庭に足を踏み入れた時から。ルークはレオナ、トリク、メニカを見回して、玄関口を見つめる。気のせいかもしれないが、ルークはカルナのあの豪快な笑い声を耳にしたような気がした。

「……それでどうするの、ルーク?」

どうやら言い争いに勝利したらしいレオナが、話題をこちらに振った。ルークはその声に振り返り、柔らかに微笑む。

「邪魔じゃなければ……雪が解けるまで、ここに居させてください」

## 終章 僕だけの思い出

愛する家族へ

父さん、母さん、リカ、リナ、元気ですか？僕は元気です。何も言わずにいなくなっでごめんなさい。反省してます。

今僕は色々あってレオナさんの家にいます。理由ははっきりと言えないけど、僕はとても大きな冒険をしました。

様々な場所で、様々な人にあつて、様々なものにふれました。凄く危険な経験もしたけど、凄く大事なものも思い出せた3ヶ月でした。

冒険、なんて言ったらリカが聞きたがるかもしれないね。けど…これは秘密。

……ごめんね？けど、これは僕だけの冒険だったんだ。

そう、僕だけの冒険。

そして僕だけの、大切な思い出。

F  
i  
n  
.

## 終章 僕だけの思い出（後書き）

『ALF』を最後までお読みくださり、ありがとうございます。

これは私がウン年前に書いたもので、読みづらいところが沢山あると思います。投稿の前に直そうかと思いましたが、成長の証かなと思い、あえて直さずに投稿しました。ご了承ください。

作品を読んで、心の中に何かが残る……そんな物語を目指してこれからも頑張っていきたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9683p/>

---

A L F

2011年1月11日20時39分発行